

第21回「森林と市民を結ぶ全国の集い in 京都」

「緑と水の森林ファンド」助成事業

伝統—森林—未来へ

～森林と関わる暮らしの歴史を学ぶ～



実施報告書

2017.6/10 土 — 6/11 日

主催 森林と市民を結ぶ全国の集いin京都 実行委員会 / 公益社団法人 国土緑化推進機構 / 京都府

共催 京都府立大学 / 公益社団法人 京都モデルフォレスト協会 / 公益財団法人 大阪みどりのトラスト協会

後援 林野庁 / 全国知事会 / 全国市長会 / 全国町村会 / 美しい森林づくり全国推進会議 / 全国森林組合連合会 / 一般社団法人日本林業協会 / 京都府森林組合連合会 / 京都府木材組合連合会

協力 林野庁近畿中国森林管理局 / 一般社団法人京都北山杉の里総合センター / 京都森林インストラクター会 / 一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会 / 京都府立大学森林ボランティアサークル森なかま / NPO 法人エコネット近畿 / 京都府林業士会 / NPO 法人森づくりフォーラム / 三洋化成工業株式会社

目 次

| 開催概要

◆開催概要	4
-------	---

◆参加人数	
-------	--

◆プログラム（日程）	5
------------	---

※エクスカージョンコース：1 京都北山・2 京都東山・3 森の京都・4 大阪北摂

| 全体会

◆開会式あいさつ	7
----------	---

実行委員長 篠部幸雄 ・ 国土緑化推進機構 専務理事 梶谷辰哉

◆基調講演	8
-------	---

「森林によって人はどう生かされているか」

本山修験宗管長 聖護院門跡門主 宮城泰年師

◆エクスカージョン・コースレポート	15
-------------------	----

京都府立大学 森林ボランティアサークル森なかま 学生

◆パネルディスカッション	24
--------------	----

「これからの木づかい森づかい」

コーディネーター 篠部幸雄

パネリスト 多胡歩未・小谷義隆・高御堂厚・松田純一

◆閉会式あいさつ	35
----------	----

京都府立大学 副学長 田中和博

| 資料

◆アンケート結果	36
----------	----

◆事務局より	39
--------	----

◆実行委員会・スタッフ・関係者名簿	40
-------------------	----

開催概要

◆開催概要

京都やその近辺において、森林が歴史的に果たしてきた役割を伝統文化や日々の暮らしの中に学び、森林がいかに暮らしにとってかけがえのないものであったかを感じ、これからの地域の発展における木材利用を含めた森林への関わり方を、一般市民、学生、企業、団体など多くの人々があらためて考えるとともに、市民森林活動の新たな方向性を探りました。

- ◇名称 森林と市民を結ぶ全国の集い in 京都「伝統—森林—未来へ」
- ◇期 日 平成29年6月10日（土）～11日（日）
- ◇開催場所 エクスカーション： 京都北山コース、京都東山コース、
森の京都コース、大阪北摂コース
全体会： 京都府立大学・稲盛記念会館（1階）
- ◇主催 森林と市民を結ぶ全国の集い in 京都 実行委員会、公益社団法人国土緑化推進機構、
京都府
- ◇共 催 京都府立大学、公益社団法人京都モデルフォレスト協会、
公益財団法人大阪みどりのトラスト協会
- ◇後 援 林野庁、全国知事会、全国市長会、全国町村会、美しい森林づくり全国推進会議、
全国森林組合連合会、一般社団法人日本林業協会、京都府森林組合連合会、
京都府木材組合連合会

◆参加人数（6月10日 エクスカーション70名／6月11日 全体会 101名／延べ171名）

☆エクスカーション

① 京都北山コース	————	16名
② 京都東山コース	————	25名
③ 森の京都コース	————	17名
④ 大阪北摂コース	————	12名



◆ プログラム

6月10日(土) エクスカーション

* 次ページ参照



6月11日(日) 全体会

10:00	開会式 歓迎のことば 実行委員長 篠部幸雄 主催者あいさつ 公益社団法人国土緑化推進機構 専務理事 梶谷辰哉
10:10	基調講演 ≪講演者≫ 本山修験宗 管長 聖護院門跡 門主 宮城泰年師 ≪演題≫ 『森林によって人はどう生かされているのか』
11:20	エクスカーションレポート ≪発表者≫ 京都府立大学森林ボランティアサークル 「森なかま」の皆さん
13:00	パネルディスカッション 【コーディネーター】 篠部幸雄 (京都森林インストラクター会 会長) 【パネリスト】 多胡歩未 (木のおもちゃ arumitoy 主宰) 高御堂厚 (一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会 まちづくり部 部長) 小谷義隆 (合同会社能勢さとやま創造館 代表/炭焼師) 松田純一 (京都府森林組合連合会 参事)
14:30	閉会式 閉会のあいさつ 京都府立大学 副学長 田中和博
15:00	解散



京都北山コース

スケジュール

- 10:00 ①JR 京都駅八条口 観光バス乗降場（京都京阪ホテル北側）集合
 ②京都北山杉の里総合センター
 北山杉の育成・北山丸太の加工工程をDVDで見て学ぶ。質疑応答
 京都北山杉の里総合センター 昼食・館内見学
 枝打ち作業実演見学 北山丸太の砂磨き体験
 北山杉育成林見学 北山丸太市売り製品倉庫見学
 ワークショップ「北山杉のお箸づくり」体験
 バスに乗り込み中川集落に向けて出発
 ③中川八幡宮：北山杉の母樹、大台杉、丸太加工木造倉庫群見学
 宿泊施設へ移動
 17:30 ④宿泊施設「丹波自然運動公園 トレーニングセンター」
 18:30 交流会開催



京都東山コース

スケジュール

- 10:00 ①JR 京都駅八条口 観光バス乗降場（京都京阪ホテル北側）集合
 ②京都市文化財建造物保存技術研修センター
 檜皮葺き技術の見学
 ワークショップ「北山杉の板を葉っぱと漆で飾る飾り物」・昼食
 東山山頂公園へ向かって徒歩
 「世界遺産貢献の森」檜皮葺き原料となる檜皮を提供するヒノキ林の見学
 東山山頂公園・展望台
 ③知恩院
 ④京都御苑・拾翠亭に入室・見学
 宿泊施設へ移動
 17:30 ⑤宿泊施設「丹波自然運動公園 トレーニングセンター」
 18:30 交流会開催



森の京都コース

スケジュール

- 10:00 ①JR 京都駅八条口 観光バス乗降場（京都京阪ホテル北側）集合
 ②かやぶきの里（重要伝統的建造物群保存地区）
 かやぶきの里ガイドウォーク（地元ガイドが案内）
 昼食（ジビエ料理 文化村 かやぶき別館）
 ③京都丹波国定公園内の里山森散策
 （五波峠から中山方面へ地元ネイチャーガイドが同行）
 ④美山町自然文化村文化ホールで座談会
 （かやぶき保存会、ネイチャーガイド、猟師）
 宿泊施設へ移動
 17:30 ⑤宿泊施設「丹波自然運動公園 トレーニングセンター」
 18:30 交流会開催



大阪北摂コース

スケジュール

- 10:00 ①JR 新大阪駅南口 集合
 ②豊能町牧「菊炭クラブ」台場クヌギ見学
 昼食
 ③地黄湿地・再生（下池）見学
 ④能勢さとやま創造館・菊炭生産の名月窯見学
 ⑤浄るりシアター・意見交換会
 宿泊施設へ移動
 17:30 ⑥宿泊施設「丹波自然運動公園 トレーニングセンター」
 18:30 交流会開催

開会式あいさつ

【森林と市民を結ぶ全国の集いin京都

実行委員長 篠部幸雄】

皆さん、おはようございます。今から「第21回森林と市民を結ぶ全国の集いin京都」の全体会を開催します。サブタイトルは「伝統－森林－未来」ということですが、各地からご参集いただきまして本当にありがとうございます。昨日の活動は、京都だけでなく、大阪北摂を含む4か所の歴史のある地の森を、エクスカッションとして探訪してまいりました。私も本当は全部の箇所に行きたかったのですが、後からレポートをやってくれることになっていますので、楽しみにしております。

長く都があった京都とその近郊は、森も歴史に彩られたものがあります。

基調講演をしていただく聖護院門跡の宮城門主のお話も、長い伝統の上に成り立ったものではないかと思って楽しみにしております。昼からのパネルディスカッションでも、伝統の話は色々出てくると思うのですが、それを知って生かしていくのも我々の課題かなという風に考えております。また、今日の催しには、先程おっしゃった通り、多くの団体にサポートしていただいているのですが、この京都府立大学の森林ボランティアサークル「森なかま」の若いメンバーが、スタッフ他色々参加してくれています。どうもありがとうございました。では、昼を挟んで長時間とはなりますけれども、最後までお楽しみください。よろしくお祈りします。

【国土緑化推進機構 専務理事 梶谷辰哉】

皆さん、おはようございます。昨日の交流会に参加された皆様、ご参加いただきまして大変ありがとうございました。また、各地から大勢の方に参加していただきましたことに対して、お礼を申し上げ

たいと思います。皆様方にはこのように、国土緑化運動というものにいろんな意味でご支援ご協力をいただいておりますことに対しましてもお礼を申し上げたいと思います。この森林と市民を結ぶ全国の集いですが、平成8年に第1回が行われまして、今回は21回目という事になります。森林ボランティア団体の黎明期からボランティア団体同士で情報交換、あるいは意見交換の場として開催されてきたわけですが、これまで延べで4500人以上の方が参加してきているという風に把握しているところであります。最近では、東京と地域を交互に開催する方式をとってきており、昨年は東京でしたが、今年は地方開催という事で、京都になりました。素晴らしい場所で開催できまして、本当に嬉しく思っているところであります。しかもですね、京都府単独ではなくて、大阪との連携で開催という事になりまして、近隣の地域が連携して開催するというやり方が、今後の集いの在り方の一つの方向を示しているのかなという気がしております。

今回のテーマは、先程実行委員長からお話がありましたように「伝統－森林－未来へ」～森林と関わる暮らしの歴史を学ぶ～となっております。京都、大阪の文化や、歴史に学びながら未来に向けた森林と人との関りを、皆さんとともに考えていきたいと思っております。

本日は基調講演として、聖護院門跡門主の宮城泰年様のご講演をいただきます。その後、昨日の4つのエクスカッション報告、これを踏まえたパネルディスカッションを予定しております。実り多い内容を体験できることを期待しております。基調講演を快くお引き受けいただきました宮城様、本当にありがとうございます。それから、パネルディスカッションでご登壇いただく皆様、さらにはエクスカッションの報告をいただいた学生の皆様、その他、開催準備に大変ご苦勞をいただきました実行委員会の皆様にお礼を申し上げます。開会のご挨拶といたします。今日はどうぞよろしくお願いいたします。



【本山修験宗管長

聖護院門跡門主 宮城泰年師】



ご紹介をいただいた宮城でございます。本山修験宗というのは、何をしている宗派かという、山に入っているという生活が非常に多いわけです。つまり、弁慶の勤進帳でもご承知あるし、能狂言にも使われている山伏が出てまいりますけども、その修験道の世界の一人です。修験道というのは、非常に古くから日本にあります独自の宗教なんです。

古代の人たちは、私たちの肉体が減びたら魂はどこに行くのだろうか、今でもそのような命題は、お浄土がある、最後に極楽浄土がある。そんなことを疑問に思ったわけです。昔から、どこに行くのか、もっと具体的に考えていたんです。その山です。つまり、ご先祖は、その地域の山に昇って、下界の私たちを見ていると。そういう感覚で山の神性に触れようとする。山に入らずに下からその山を神聖なものとして拝んでいた時代があったんですけども、やがて6、7世紀ごろになりますと、人々は救われ信じた山に入るようになっていく。つまり、この身体でその山の靈気に触れるようになっていく。そういったところから山岳信仰の集団に発展いたしますけども、その始まりは、西暦の634年に役行者という人が奈良県で生まれて出てきた。その人によって大峰山と葛城山が開かれた。その後、山岳信仰者達が各地に集団をこしらえて行って、その集団を統率していったのがこの京都にあります聖護院です。

熊野三山というのは、後ろに山林を控えて、今も熊野古道がございましてけれども、そうした広い地域を統括していた。その熊野三山の検校職というのを聖護院が受けることになるんです。

検校職は、そこの管理事務を取り扱う山伏でありながら、現在の神社の神域を管理しとったということです。さらに熊野から吉野に向かう大峰山脈を歴代の高僧たちが歩くことによって、開発されていったということになりました。

世界遺産に大峰山脈奥駈道が参詣道として指定されたときに、私たちがそれを記念して吉野から本宮までを歩き通そうということで、普段でも約100キロを歩いておるんですけど、その時は約230キロを縦走したわけです。十二泊十三日というコースで行ったことがあるんですけども、大部分が山の中です。もちろん、現在でも大部分が山の中でありますので、昔はもっともっと森林の中を歩いていたはず。そうした山伏が、一つの理念として持っておりましたのはね、尾根筋から左右800メートルは入ってはいけないという御法度があった。御法度というのは規則です。それは山伏言葉で言いますと、「なみきはちょうのいけず」って言うんですが、要するに尾根筋を中心にして800メートルは伐ったらいかん。その当時はですね、そこは先祖の神々が、そして仏教が伝わって以後は、仏たちもその世界に住まい致しているところやから、そこにあるところの一木一草だけではなしに、そこにあるところの岩も草もみな仏の顕現である考え方から、山川草木悉有仏性というて、山にも川にも草にも木にも、みな仏となりうる性質を持っているんだという生命体として受けとめているわけなんです。そこは神々の世界である。ですから私たちはむやみやたらとそこに入り込んだり、あるいはもちろん木を伐ったり、石を動かしたりするということはしてはならないんだという御法度があったんです。それを犯しますと、苦行を課せられるという厳しい掟があった。そういう

風な世界が私たちの前にありまして、大部分がこの山の中に生活をするという。今でこそ一週間で帰ってきますけども、江戸時代まではですね、55日間かけて京都と本宮の間を往復しております。ですから、非常に長い間山の中で生活をしている。当然のこと、山に入りますと山の靈気に触れる。

身近な話でね、大学で講義をしておりました時、学生を実習に連れて行って、大峰山に入りますと、入る前はですね、今日びの学生のこと、「先生、山でシャンプーできますか？」って言う子があったんで。お風呂だけではなしに、シャワーは無いんですか？」とかね、下界と同じ感覚でものを言う子がいる。とてもとてもそんな世界じゃない。晩ご飯でもですね、ご飯はおかわり自由やけども、おかずの方は味噌汁と、それから煮豆と高野豆腐とこんにゃくとしいたけとお昆布が薄めの味で炊かれてある。それとお漬物が一、二切れ、それだけで晩ご飯を食べる。そうした世界です。「シャンプーできますか？」って言った子供たちが、そこへ入ります。で、一泊二日で帰ってくるんですが、その帰ってくる青年たちを見ますとですね、私は連れて歩いているだけであまり感じないんですが、待ち受けていた女性たちの話を聞きますと、行く時と帰る時と顔つきがかわっているやないのと。やはり山の中で何かを得てきているんだなあ、という話が出ます。それはやはり、山の靈気に打たれてきているということ、それから自分が山の中で行のうてきた、木の根にしがみつき、あるいは岩に取り付いて行場というところを回ってきた中で山と一体感を身体に植え付けて下りてきたところの成果ではないだろうか。そういう風に思うわけですね。

そして、私たちを迎えてくれる山、というのは今日のテーマが、森林によって人はどう生かされているのか、という事ではありますが、まさにそれは森林だけではなくて、修験道のもの受け止め方というのは、森林という一つの枠に囚われずに、森林を含む、自然環境全体が私たちの世界なんです。私たち自然環境全体の中に森林がある。もちろん森林は非常に大きなウェイトを占めておりま

す。この京都でも府のだいたい4分の3くらいが森林なんです。そういたしますと、私たちの世界の4分の3、昔はこんな風に建物がようけ無かったわけだから、もっともっと緑が豊かであって、4分の3以上だと。そういう風な世界の中で、修験者達、信仰者達に限ったような話をしますけども、全体が、つまり住んでいる人達全体がそういう雰囲気の中に生きていたことは間違いないです。

ちょっと古い京都市の市歌、私たちが聞いた子供の時には「山麗しく水清く」という歌いだしがあります。その「山麗しく水清く」というのはまさに、京都が周辺を山で囲われていて、囲われている山から流れ出るところの、鴨の水、あるいは白河の水、そういうものが清い水である。それを生活の中で捉えているなればこそ、そうした京都市が生まれてきたわけであろうと思いますが、その京都に住んでいる中の修験の本山というものは当然のこと、聖護院の歴史はですね、890年ほど前にできるんです。そして、我田引水するわけじゃございませんけれども、山伏の総本山であるのと同時に、歴代、明治までは37代のうち25代が皇室から直接お入りになって門跡を務めるというお寺でありましたんで、非常に京都の皇室と深い関係を持ってあった。そういう雅の世界にありながら、修行の面においては体育会系の世界であったということですね。それが当たり前ですから多くの人達が、山伏にならずとも、自然の中に生きていくうえには大なり小なり、今言った体育会系的な生業をせざるをえなかった。そういう自然を広範囲に捉えてまいりますと、そこにありますところの岩とか木とか、その中にいろんな動物がおります。鹿も猿も猪も、それからミミズも蛙も、いろんなものが出てまいります。この近郊の山でも鹿が出すぎて困っているわけなんですけども、一様に自然の力を受けて生きている。自然の力を受けずに生きている動植物というのは無い。そうしたその自然というものの世界をやはり私たちは、考えていく必要がある。

私も原生林の中に入りました時に、なんで原生林に入ったかいうたら、「なみきはっちょう」も入れて800メートル伐ったらいかんという

原生林の中へ実は迷い込んだことがあるんですけども、なんでこのような木があるんだ。その時は必死で、そこから抜け出すことを考えていたんですが、落ち着いて見れば不思議な世界が、尾根筋に近いところであるにもかかわらず、何百年も堆積した落ち葉の中にズコーッと足を踏み入れてしまっ、抜いた後フツと見ればその下から水がジュワーっと上がってくるし、水と一緒に長さ30センチほどあるような太いミミズがヌーっと出てくる。こんな風にして土が作られ、保水され、この水がやがて山の下に流れていくんだなということ、そして腐葉土がこしらえられていく、木は自然に朽ちていって倒れる。そしてまた新しい芽が出てくる。新しい芽は大きな木に保護されていて、それが倒れた後俄かに力をいれて大きくなっていく。そういう具合にして循環している。死骸や糞も山の土を肥やしていくのに大いに役に立っている。そういう循環している世界がそこにあるという事を見ます時に、一番中心になっているのは、やはり自然が生み出したところの森林あたりだろうか、という風に思うんです。

山伏は山に入りました時に、山のあちこちで拝みます。拝みます対象は自然なんですけど、やはり対象を見て拝む。その対象は、大峰山脈の中に吉野から本宮に至りますまでに75か所あるんです。その75か所の一番多いのが木なんです。その木もやがては倒れます。その後次の木がその付近に木が生えてたらその木が拝みの対象になる。倒れてしまえば大きな木がこっち側の対象になる。そういう具合にして常に山中に生えている木に神性を感じて拝みながら行く。岩というのは変わりませんけれども、岩を拝むよりも木を拝むことの方が非常に多い。なんなんだろうか。私たちや昔の人は、自然にそこから出てくる場所の自然の恵みを感じ取っていたんじゃないだろうか。

もちろん、今ここにお集まりの皆さん方は、森林がどのような作用をしているかってのをご承知なのは、私がいうまでもないこと。先程言いましたように、水を供給してくれる水源である。それから、土を再生して、循環して、常に生き返らせ

ている世界である。もちろん、CO2の吸収をしてくれるし、また、森林が多ければ多いほど、地球の温暖化に対して精をしてくれる存在である。多くの恵みを持っていることは、皆さん方がもうご存知のわけですね。

昔の家屋は木造建築。聖護院の建築もつい10年余り前に鉄筋コンクリートの庫裏ができましたけども、それまでは全て木造でありました。木造建築も、最近是非常に少なくなってきた、京都府下の平成27年の新しい建築物の半分以下になっているんです。江戸時代は、ほぼ100%の建築物があったようなんですが、木造の自給率が、今では非常に減少していて30%ぐらいというのを聞いたんですけども、木というものが京都府の4分の3、大峰山脈に入れば全山、木ですが、そういうようなものがありながら、日本の国土の66%が森林であると。しかも66%のうちの半分くらいが自然林だという風に私は聞いたことがあるんです。そうした森林に恵まれながらですね、森林の利用されるのが、自給率が非常に少ない。これは昭和30年代からの国の政策の過ちだろうと思うし、このたくさんの植林を推奨したっていうのが昭和30年代だったと聞いております。



私は昭和30年代の後半に、広島県の三次市へ行きましたが、その前前年に水害で全市水害になったことがあります。山が崩れて川がせき止められて、そして町が湖になってしまった。そこで乗ったタクシーの運転手が言いました。別に私と気持ちを通じていたわけやないんやけども「お客さんねえ、こんな水害になったのは神さまが怒らしたんですわ」いきなりそう言うんですね。「植林植林言うて山を丸裸にしてもて、ほいでそこにいっぱいスギの木植えはりましたんやわ。そんで、いっぺんにその山が崩れてしてもて、ほいで、水害のもとになりまして

ね。今まで、ここはずーっと自然林が多かったとこやのに、それをいっぺんに伐ってしもうて、せやから神様怒らはるのは当たり前でっせ。」こういうことを聞いたんですね。なるほど、この運転手はね、実に的確なところを答えていると。私たちが森林をどのように利用していくのかっていうのを、その人は植林植林いうのを進めたところにも問題があったと。

今の山林見てますと、熊野の方へまいりますと、一時に全植林をせず部分的にしている、一時にはげ山にしてしもうて植林を進めてしもうたら山が荒れるから、部分的に年月を変えて伐採し、植林をしているんだってことを山林業者から聞いたことがあるんですけども、なるほど、それも自然と人間とがお互いに融和しながら生きていく知恵なんだと。ですから「森林によってどう生かされているか」っていうことは、森林とどう語り合っていくか、どう向き合っていくか。森林によってどう生かされているのかっていうのと同時に、森林をどう生かしていくのかっていうのも人の知恵ではなかろうかということを経地へ行って感ずるところがありました。そこの私の出しましたレジュメにですね、何人かの人の言葉をあげておきました。まず古い方ではですね、これは山林と直接関係はしておりませんが、明治時代の国会議員である田中正造という人が、足尾銅山の銅の廃液によって渡良瀬川がすっかり汚染されて、その川下の農家が銅害を被り、そして畑が育たなくなっていく。そういったときに遂には明治天皇に直訴までするという行動に出た強者なんですけども。まず銅山開発するために、その神聖な山を丸裸にしているわけです。その結果、川は一時に雨が降れば一時に増水するし、川を荒らし、その結果村を荒らし、その結果人間が生存を脅かされるということで、文明開化を求めた足尾銅山に対して、真の文明というのが山を荒らさず、川を荒らさず、村を荒らさず、人を殺さずあるべしという事を言って、一生渡良瀬川の近くに住んで、その講義をしながら一生を終えたという国会議員なんです。

その足尾銅山の山は、会社の方が植林事業に踏み切りまして、現在では会社の植林が功を奏して青々とした山になってきている。けれども、そうしたのとは何かっていうのは神の世界を侵した、神の世界を侵したっていうのは何か、文明開化のために人々はやってはならんことをしたんじゃないのかっていうことですね。だから明治天皇に粘菌の見本を差し上げた箱はキャラメル空き箱だったという逸話を持っている南方熊楠。熊楠は、明治政府が、それまで自然の中で大きく育ってきた熊野の山林でタイハイボクが育っていたのを利用するために伐採を始めていた。皆伐をしているというのが、その当時は、熊野の山、熊野の道あるいは熊野の里というのはですね、神々の世界、熊野古道というのが九十九王子と言われるように、たくさんの神様がいらっしゃる、もちろんその神についたところの林があるわけですね。明治の宗教改革によってそうした小さな神社は一村一社に統合されていった結果、社有林というのが公共のものになった。それを明治政府はどんどん伐り始めたときに、南方熊楠がこの皆伐の方針について抗議した言葉がそこに出てるわけですね。森の相互関係は甚だ密であるという、相互関係というのは、非常に素晴らしい言葉だと思うんです。それは、大きな木の下では小さな木が保護されるように、弱い木が育っていくし、そして、自然林の中では、横に木の根をはる木もあれば、深く地中に入っていく根もあれば、あるいは木に巻き付く蔦のようなものもあれば、お互いにみんなを助け合って、そして一つの大地というものを保護している。だから、お互いに関係して生きてるんだと。その関係している密接なものを取り払ってしもうたならば、大地だけではなしに、水もダメになります。そういう生きてきたという世界を皆伐することはあいならん、とやうて運動します。

その結果、熊野古道でいう野中の一本杉といって中がちょっとうろになったような杉になってきてまして、そういう大きな杉が今日まで残って、一つの名所にもなっている。それはそうした熊楠の、大きな森に対する愛情が、今日に遺産として残った、という風に思えるわけですね。

そういう熊楠の主張を始めたのは何かっていうと、やはり開発だった。開発っていうのは、今までの森を開発してそこに住宅をつくるということもあろうかと思いますが、その時は、木を都会にもって行って、それで大きな建物を作るという、先程の言葉とちょっと矛盾するところもあります。木造自給率という事で、木造で三階建て四階建てを造ろうとした。そういう大きな計画の中に使われていったんでしょうけども、でもそこです、自然にある森林を、私たちがそこにある木が互いに支えあっていただけじゃなしに、その村を支えていた、相互に関係していた甚だ密なものをバラバラにしてはいけないよ、ということだったと思います。でもまあそうして私たちは、色々の恩恵を被りながら人間の知恵はどんどんどんどん科学を進展させながら、文明を高度なものに育て上げながら、そしてその中に今日私たちが生きております。そういう高度発展の中に私たちは、森林というものに対して、その恩恵を被ってきたことに対して、どういう態度をとってきたやろうか、ということも反省しなければならぬだろうと。

もちろん日本はまだ、非常に森林が多い、非常に山林が多い。世界の山林が陸地の約30%になってきているという状況で、日本はだいたい60%以上、京都府とほぼ匹敵するくらい山林の保有状況がある。そういう世界の中に住んでいる私たちは、もう一度山林の中に生きてきたご先祖からの魂を引き継ぐものとして考えることは何なんだろうかと。もちろん、開発と言いますか、生活の利便性を求めて生きていかなければならないこともたくさんありますけれども、自然というものからあまり離れすぎたはいけぬだろうと。

山林と直接関係ないけれども、IT産業の発達によって、私たちお坊さんのデスクに、皆パソコンが置いてある。でも、ものを書くのはペンで書く、お札を書くのは墨で筆で書く、手紙も出来る限り毛筆、あるいはペンで書くということ、私どもの寺は推奨しております。事務的なものはパソコンで打ち出してもいいじゃないかと。しかしながら手紙はパソコンで送ってはいかん。みんな、

字が一緒ですからね、画一的な字。手紙で字書いたら嬉しかった、悲しかった、辛かった、そういうのはどことなしに文字に表れてくる。文字の大小にも、力にも、墨の濃淡にも表れてくる。それを大事にしていけないかんと違うか言うて。パソコンをみんなに持たせていますけれども、必要なもの以外は、できる限り自分たちの手で書くように、お寺では和紙をようけ使っております。そういう和紙は、上等なものになれば手漉きの和紙を使うて辞令を出しております。そういうものは非常に大事なもので、木のミツマタ、コウゾですね。

私はこの5月も高知県へ和紙を漉きに行ったんです。多くの人たちがその和紙の原料を山からとってきて、それを皮はいで、煮詰めて繊維にして、その繊維を色々組み合わせによってですね、私たちが望むところの和紙の性格も変わってくるんでしょうけども、それによって一つのものできてくるまでの、ずいぶん工程のある材料ですね。当然和紙というのはちょっと高価なものになるけども、高価やから失敗したらあかんで、というのではない。お寺の場合ではそれだけの工程を経てきているよってに大事にせないかん。こないだ60枚の色紙を手漉きでやっただけの手を経てやってきているものやから命を大事にせないかん、という考え方をお寺のものには指導する。そういう生きているものだという事を体験するために、お寺のものには手漉きの紙を手漉きに行かし、そういうような体験をすることによって、自分の前にどのようにしてこれが手に入ってくるかが分かる。私たちは、それによって身体で覚えてくるわけですね。

先程IT産業の発達という事で言いましたけども、下の方に六根清浄という言葉をちょっと書いときました。六根というのは人間の眼、耳、鼻、舌、身、意という6つの感覚器官なんですけど、要するに視覚、聴覚、嗅覚、触覚なんですね。味覚もある。

そういう感覚が、十二分に備わっている生活をしようとする。ここでもスマホで大いに助かっている方もいるんです。便利なものは便利なところで使わなあかんと思いますが、その問題ですね。

京都駅で女子学生がズラッと整列して列車に乗る前に、一列にずーっと並んで、全員が、本当に全員でした、全員がこうやって、無言で静かに並んでいる。横から見たらですね、異様な光景なんです。まさか前の人と後ろの人とメールでやっているとは思いませんけれども、修学旅行をしていた結果を国元へやっているんでしょうけども、なんで、楽しかったよ、面白かったよ、夜寝られへんかったよと、そういうのを口で言わずに写真、メールで送ってしまいたいってどないなるんやろな。私たちは何のために口がついており、目がついており、耳がついており、それを100%生かそうとしないんだろうかと。

森林に入っても、森の中でスマホを使うようなことがあったら、私は泣かんならんな。森に入ったらですね、森の靈気に打たれて出てこなあかん。実は私、スマホを持ってへんから勝手なこと言いますが、現在位置が分かるんですね。この前も、大文字山から如意ヶ岳を越えてミダへ抜ける途中で、ちょっとルートが分からなくなったところで地図を出して等高線見ながら周りを見とったら、「先生、これ道合うてますよ。」「なんで？」「現在位置出てますもん。」アッというようなもんです。どこが違うか。スマホで見たら確かにすぐ分かります。でもね、私が持っているのは、陸測（※陸地測量部：国土地理院の前身）の地図です。等高線が出てます。どのくらいの傾斜角度か、前に山があるのか、この等高線で割に合うのがあんのやろうか、高圧線が走っているのがちゃんとそこにも出てきてる。現在位置を自分の目と感覚とで周りをずっと見て確認する。スマホの人はこれだけ見て確認しとる。どこが違うのか言うたらやっぱり、人間の六根をどれだけ使ってるのか、ということなんやと思います。

六根というのは、それが失われていきますと、本当に人々は無味乾燥になるのではないのやろうかと。

まさかそんなことはないと思うけれども、そんなことがある。というのは、電車に座ったら前に座ってる高校生がね、二人でスマホをこうやっているんですね。それで、パッと見合して二人で

「そや！」って言ってね、おんなじことをやってたらしいんですよ。言葉なしにスマホで同じことをやってた。この二人が、ものも言わずにハッと見合わせた。それを見てね、スマホで共通の作業をしたんやなど。なんで喋れへんのやろうと。人間にはそれだけの器官が備わっているし、それから、その六根の中にはですね、単に聞こえるとか見えるじゃないに、どのように心で受け止めていくか、というものが必要なんだろうと思うんです。ですから、私は六根清浄というものは、山伏が山の中に入って修行いたします、もちろん急坂にかかりますと、「サ〜ンゲ、サ〜ンゲ」と言うて先達というてんのが唱える。そうすると内輪のもんがですね、「六根〜清浄〜」言うて返すんですね。それも、急坂になったら「サンゲ、サンゲ」という声になる。まさにそれが人と人と、それから大地と大地と、呼吸を合わせる生き方やなんやないやろうかと、そういうことを思います。

ですから、山林の中に人がどう生かされているのか、というのは、そこにあります保存されてる山林の中にですね、私たち修行者の場合です、その山林によって包まれて、生かされている。保存された森林の中に、適度な歩き方、適度な声の出し方、適度な湿度の感じ方、風の音によるところの状況なども、そこで初めて聞こえてくると。



同時にもう一つはやはり、利用もさせてもろて、山伏の場合ストックじゃなしに、ヒノキ杖です。これは真っ直ぐなヒノキ杖です。曲がってるのは使いづらい。だからちゃんとしたヒノキ杖を持って、それをついて歩いているのは、そういう恵みを得ている。私たちは単に保存するだけがベターであるという風に思いがちなんですけど、利用することも大事だし、それから、利用するについても、素人の私が思っていることだけを言えば、もっと、チップですか、木を屑にしたの、ああいうのなんかの利用価値無いやろうかなと。私とこのお寺、奥に少し仏さまに供える花を育てておる。そういったところにあのチップ撒いといたら、数年のうちに土になっていくやろうし、それが広い場所やったらもっともっと循環して再生利用ができるんやろうなと。北海道の神の子池っていうところ、あれは摩周湖の近くだったかな、そこへ入っていくと、チップがいっぱい撒いてあって、これはなるほど足元に優しいし、やがてこれが土になったらまたチップが撒かれるんやろうなと。そういうような、利用の方法というようなものも、身近なところで感じながら、やはりその恩恵によって私たちは歩いているんだ、ていうことを考えます。

ですから、どう生かされているかっていうことはですね、利用のことと、それから保存ということと、両方のバランスを考えていかならんのかなと、山林修行を続けている毎日なんです。できるならば、京都のこうした60%以上ある山林が、ブータンの憲法のように、つまりブータンは66%が山林で、憲法では永久に60%以下にしてはならないという一項目があるんですよ。ブータンに行きますとね、いたるところに発電所があったんです。小さい発電所です。もちろん下の方に行けば大きな発電所があるんですけど、ブータンの山の中をズーっと歩いていたら、山奥にも小さな発電所があって、その発電所が近くにある在所の電気を供給しています。ブータンの一番大きな産業何か知っていますか？

輸出している産業、電気なんです。インドに売っているんです。つまり、国土66%の山林から発生するところの原発が一つもない。一部火力もあるんですけどほとんど水力電気ですね。その電気を隣国に輸出している。しかも、大規模じゃなしに、その土地の人はその山から出てくるころの水を利用して。そして、電気をおこしている。ですからスマホの普及率というのもすごいです。山奥の本当に素朴な人たちが、畑の中でしゃべって耕しながらスマホを持っている。で、これこそどこにでもアンテナが立っている理由やなということのを思いました。そういう風に資源を利用する、自然資源によって生かされ、自然を大事にしてるっていう生き方、本当に素晴らしいなということのを思いながら、しかもその電気を売っておるとということにも驚きました。

日本はブータンと同じくらいの山林所有国。願わくば、これ以上本当に、まっ少子化になっていったり、段々と家が余ってきているかもしれません。開発は止まっているのかもしれませんが、これ以上開発して山林を失うようなことがあってはならない。やはり基本的には、元の出発点に戻りますけども、山林にはご先祖様が住んでいはったと、信仰上は今でも住んでいはるんや、という考え方を僕は基本的に捨ててはならないんだらうと。それによって生かされている私たちは、山林に恩を返していくことができるんでないのやろうかなということのを思います。ほとんど私の生活の中から出てくる、体験の中から出てくる話を申し上げた一時間でありましたけれども、ご清聴感謝して終わらせていただきます。

ありがとうございました。

エクスカージョン報告 ① 京都北山コース

【レポーター：

浅田みなみ・西原美緒・吉村恒熙・菊池美帆】



(浅田)

私たちは北山林業の流れとその材の特徴について学んできました。北山林業で育てられているスギは、北山スギと呼ばれています。そのスギから作られる丸太は、伝統的な技法である砂磨きによって作られる磨き丸太や、表面に絞ったような凹凸がある絞り丸太など、さまざまな種類があり、その美しさから、室町時代より床柱や数寄屋造りの高級建材として利用されてきました。しかし、近年その価格が低下し、北山林業は厳しい状況になってきています。まず、枝打ちの実演を見学してきました。足の力だけで木の上で体を支え、次々と枝を打っていく姿はとてもカッコ良かったです。見学後、はしごをかけて実際に木に登ってみる参加者の方もおられました。枝打ちは、節のない上質な材を作るために、とても重要な工程です。これはこむきという作業で、皮をむいた丸太の薄皮を先をとがらせた塩ビパイプで剥いていく工程です。これを実際に体験させていただいたのですが、皮が結構硬くて綺麗に剥くのが難しかったです。次は、伝統的な技法である砂磨きです。こむきの時にとりきれなかった薄皮をとり、木を磨いていきます。これには北山の地独特の、菩提の砂というものを使い、砂を掌で丸太にこすりつけて磨いていくと、木がツルツルになっていくのをすごく感じました。このようにいくつもの段階を経て、美しい北山丸太が出来上がります。



これを実際に体験させていただいたのですが、皮が結構硬くて綺麗に剥くのが難しかったです。次は、伝統的な技法である砂磨きです。こむきの時にとりきれなかった薄皮をとり、木を磨いていきます。これには北山の地独特の、菩提の砂というものを使い、砂を掌で丸太にこすりつけて磨いていくと、木がツルツルになっていくのをすごく感じました。このようにいくつもの段階を経て、美しい北山丸太が出来上がります。

(西原)

次に、北山丸太の倉庫を見学させていただきました。秋冬に月一回、業者向けに競りを行うのですが、こちらの写真のものは全て売れ残ってしまったものだそうです。丸太を触ってみると、触り心地が絹のような感覚で、これが売れ残ってしまったということに大変ショックをうけました。また、北山スギの箸づくりを体験させていただきました。カンナで削って箸を作りましたが、削り面がとても綺麗で、大切に使おうと思いました。次に、北山林業の発祥の地である中川地区を見学させていただきました。丸太の加工、乾燥、保存、運搬に適した建物が立ち並んでおり、圧倒的な景観でした。かつては繁栄していたそうですが、現在では人口も減少し林業も衰退してきているそうです。

そして、樹齢約400年の大台杉の母樹を見学させていただきました。

こちらの台杉というのは販売方法が二つあり、



一つがこちらの細長く伸びている部分を刈り

取り、材として販売する垂木というものと、このまま庭木として販売するものの二つがあります。台杉は、北山の丘陵などの斜面や狭い場所でもたくさんの丸太を生産できるという利点があり、植林しなくてもいいということで、まさに先人の創意工夫の産物と思います。

(菊池)

このようなエクスカージョンの後に参加者の方の感想をお聞きしましたので、発表させていただきます。一番強く印象に残ったのは、実際に見学して天然の絞り丸太がとても綺麗だったことだそうです。また、枝打ちの実演を見て北山スギは細いつくりでも木目が細かくて丈夫なつくりなのですが、その細い木の上まで登っても、たくさんしなることなく丈夫であったことに驚かれたそうです。

エクスカージョン報告 ① 京都北山コース

また、今回見学や体験を行って、今の住居体系は洋風のものが多いので、そこにも合った使い方ができるのではないかと、洋風の家にも柱として置いても映えるのではないかとという意見を持たれ、今後はそういった洋風の家やインテリアとしても広まっていったらいいのではないかと考えたそうです。また、この方は今回、実際に北山の丸太をご覧になられて、その美しさに感動され、購入して家に置きたいというところまでご検討なさったようです。このことは、今回見学をして、北山丸太の美しさに感動して、美しさや価値が評価されたことだと思えます。これは本来、昔から高く売られてきた北山丸太の評価が、今も皆さんの心の中にあるのだということが証明されたことだと私は感じました。今回のツアーでは、丁寧な作り方や美しさが、私たち参加者の心を動かしたのだと思い、とてもいい経験だったと思いません。

次に、生産者の方の思いですが、北山林業はブリークウッドと言いまして、撫でるように育てるといって丁寧な作り方をなさっています。昔はその作り方が評価され、高値で売られていたのですが、今ではなかなかその評価が昔のように行われていない状況です。しかし、北山丸太は乾燥や加工がすべて手作業で行われていて、とてもエコな加工製品なので、その価値を再認識してほしいと強く言っておられました。また、600年続く伝統を守っていきたいのですが、後継者不足など続けるのが難しい状況になっているそうです。そこでまずは観光ツアーなどで知ってもらうことで、ちょっとずつ広まっていったらいいのではという思いでおられるみたいです。

(吉村)

最後に、私たちの感想を發表させていただきます。私たちは実際に磨き丸太をこの目で見て、その圧倒的な高級感に驚き、そして誰にでも伝わるような普遍的な美しさがそこにあるのではないかと感じました。

そして、一本一本の丸太に付加価値をつけるための大変な苦勞と手間を、実際に生産者の方がかけているという事を聞いて、その素晴らしい価値を身に染みて感じました。ところが、今その価格が驚くほど下がっているという現状を知って、北山丸太のその本来の価値と評価のギャップがあまりに大きくなっていることに寂しさや悔しさすら感じました。私たちは、北山林業とその伝統が失われてしまうことは本当に悲しいと思うので、どうか残ってほしいと思っています。

そこで必要なのは、次のような人たちとの出会いなのではないかという風に考えました。まず北山丸太を新しい使い方で生かすアイデアを持っているような人。それから、裕福な消費者。このような人たちの出会いが必要ではないかと思いました。そのためにはやはり知名度のアップと、その出会いの場が必要だと考えました。知名度のアップというのは北山丸太の生産の背景や過程、その価値を知ってもらうという事。出会いの場としては、デパートやビッグサイトといった木材の展示会で、こちらの写真は実際に使われているマルイの写真ですけれども、そのような場が必要なのではないかと思いました。こうすることで、新しい北山丸太のブランド力がつき、その結果この北山丸太の価格が上がって、評価と実際の北山丸太の価値のギャップが埋まれば、北山丸太が昔のような高級材としての正当な評価を取り戻して、最終的に北山林業の再興に繋がるのではないかなという風に考えました。



エクサクション報告 ② 京都東山コース

【レポーター：松井絢・内館佳子】

(松井)

これから、東山コースの発表をしていきたいと思っています。私たちは、京都市文化財建造物保存技術研修センターで、漆塗り体験をしてきました。赤や緑などの6色ほどの漆を葉っぱに塗り、北山杉の板に葉を押し付けて、模様を写す作業を楽しんできました。



葉脈をきれいに写すのは、意外と難しく、皆さん苦労されているようでした。漆は、高級茶碗に塗

られているイメージしか私は持っていなかったのですが、絵の具のように扱えて、意外と身近に感じる事が出来て面白かったです。参加者の方も、普段は漆を使うことがないので、漆とはどのようなものかと思っておられたのですが、漆を扱うことが出来て楽しかったとおっしゃっていました。漆は乾燥(硬化)するのに時間がかかるので、今回作ったものは密封してありますが、6月17日に開封するのを楽しみにしています。

また、研修センターではムービーを見て伝統的な屋根葺きについて学びました。ムービーの内容を少し紹介したいと思います。屋根葺きは、檜皮葺き、柿葺き、茅葺きの三種類があります。檜皮葺きは、ヒノキの外樹皮を使って作るもので、お寺や神社の屋根に使われています。この写真は、檜皮葺きの屋根です。檜皮は竹の釘で止められていて、こちらは、竹釘でとめる体験をしている様子です。

柿葺きは、スギ、サワラ、クリなどの板から作られています。玉切りの木材から手作業で3ミリ幅の板が作られています。一つ一つ丁寧に作られていて、その様子をムービーで見たのですが、本当にすごく繊細な作業ですごいなと思いました。

材料は板なの

ですが、このようなカーブのところは、板自体が曲げられて美



しい曲線をうみだしていました。檜皮で屋根を作っているのは知っていましたが、木材の板で檜皮やアシ、カヤのように屋根ができていくということを初めて知り、私はすごい衝撃を受けました。屋根葺きの作業はとても難しそう、昔の人はこのような超人的な技術を生み出し、また伝え続けてきたことは、本当にすごいことだと思いました。私は、屋根葺きを美しいと思うので、未来に残ってほしいと思っています。そのためには多くの人に屋根葺きの技術を知ってもらうことが必要だと思いましたし、私は、この美しい！すごい！と感じたこの感動を皆さんというか友達や周りの人に伝えていくことで、その一端が担えるのではないかと感じました。

(内館)

次に、東山の散策についてお伝えします。清水寺の裏から知恩院までのルートを散策しました。道中、植物や歴史に関する知識をたくさん教えていただきました。植物に五感で触れることで、感動は倍増したのではないのでしょうか。例えば、これはシホウチクという竹です。竹の茎の部分が丸ではなくて、少し角ばっていて、それも、手で触れることでよくわかったのではないのでしょうか。もう一つは、写真はないのですが、タラヨウという大きな葉がありました。

エクスカージョン報告 ② 京都東山コース



それは堅いもので傷をつけると、黒く跡が残る特徴をもっています。その特徴を利用して、手紙などを書くことが出来るみたいで、これは実際にはがきとして郵便で送ることが出来るそうです。参加者の中にも名前を書いて感動している人も見受けられました。

次に、京都御苑の拾翠亭という建物に行きました。普段は入れないお茶室にも入れさせていただいたので、とてもいい機会だったと思います。この建物の屋根には、さっき説明のあった柿葺が使われています。この写真は、二階から見た庭の風景になっています。奥の方に

ある木々で今は見えなくなっているのですが、昔は東山を一望できたそうです。



このお茶室で私が気になったポイントは2つありました。これは外にある屋根の裏側ですけれど、角材ではなくて、部分的に丸太がそのまま使われていました。この丸太は、末口と元口の直径が同じで節もなかったので、とてもいい木なのだなあと感じました。2つ目の気になったポイントはお茶室の床です。ここが床になるのですけれど、周りの縁の木が三つとも種類が異なります。右手がサルスベリで、上がヘゴシダ、左手はスギの磨き丸太が使われています。広葉樹などを使うことで趣を出しているそうです。

こういった狭いお茶室の中でも、遊び心を加えることで、お客さんが楽しめるように工夫しているのは、亭主の心遣いなのではないかと思いました。今回、いろいろ、京都の文化的で伝統的なものに触れることが出来ました。これらの伝統は、今まで受け継いで伝えてこられた方がいるこそ私たちが今見ることが出来ているのではないかと実感しました。今後は私たちが若い世代への架け橋となるようなそういう存在になれば良いのではないかと思います。

以上で終わります。

エクスカージョン報告 ③ 森の京都コース

【レポーター：三谷光市・二宮亜由美】



(三谷)

僕たちは、森の京都コースということで、南丹市美山町に行かせていただきました。僕らが行ったかやぶきの里や芦生というところは、京都駅から北上して1時間半ほどの場所になります。かやぶきの里や芦生は京都、滋賀、福井の県境付近に位置していますが、この緑色で色づけされている地区が、去年国定公園に指定された地区となっています。そして、僕たちが体験させていただいた行程ですが、まず、かやぶきの里のガイドウォークをしていただいて、昼食にはジビエ料理をいただきました。その後、ネイチャーガイドさんと一緒に、京都丹波国定公園内の森林の中を少し散策させていただきました。その後に3人のパネリストの方と座談会をしました。

(二宮)

はじめに行ったかやぶきの里から紹介したいと思います。

かやぶきの里は、平成5年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、



年間約25万人前後の人が訪れる場所です。茅葺の家の中には200年前に建てられたものも存在して、現在も空き家はなく人が住み続けています。茅葺屋根は自然に優しいという一方で、火災に弱いという弱点もありますので、火災の際に火が移るのを防止するために、放水銃というものがあります。

平常時には左上の図のような感じなのですが、火災時には、この右下のように開いて水が放水されます。全体で放水されると、このような景色が見られるそうです。

(三谷)

次に、昼食でいただいたジビエ料理について紹介させていただきます。ジビエ料理はこういう風から左下から鹿肉丼、右下が猪肉のフライ、真ん中の上がロースト鹿で、左上が鹿肉団子のお鍋ということで皆さんおいしくいただいております。



昼食後、京都丹波国定公園内の山の散策をネイチャーガイドさんに案内していただきました。バスで移動中もクリ、

アジサイ、ウノハナなどを眺めながら、福井県との県境までいき、標高600mほどのところまで、ミズメ、ハリギリ、タムシバなどを観察しながら歩きました。この写真に写っているのがブナの巨木なのですが、ブナは、森の母と呼ばれておりまして、ブナー本ブナ千匹と呼ばれるほど、ブナは水源涵養機能を果たしてしまっていて、それを実際に体現しているという説明を僕たちは受けました。また、貴重な植物ということで、ギンリョウソウという植物を見せていただきました。このギンリョウソウというのは、植物なのですが、光合成に必要な葉緑体を持ちません。葉緑体は持たないのですが、栄養は、菌に寄生することによって栄養を得てしまっていて、その菌も他の木の根っこから栄養を得ているという説明を受けました。それで、この芦生の森は生き物同士が助けあって生きているのだということを実際に教えていただきました。

エクサカーション報告 ③ 森の京都コース

(二宮)

最後の行程として、美山町自然文化村文化ホールというところで座談会が行われました。この写真の奥に見える3人の方がパネリストの方々です。座談会のパネリストの方の3人を紹介します。左が中野貞一さんです。美山町北村地区に生まれ育ち、現在茅葺保存活動を行っています。真ん中の方が、高御堂麻里子さんで、約20年前に美山に移住され、今は茅葺の家に住んでおられます。ネイチャーガイドとして活動し、美山の自然の良さを伝える活動をされています。一番右の方が藤原誉さんで、漁師の方で、約20年前に美山に移住されました。その後、田歌舎という会社の代表として現在は活動されています。この田歌舎については、衣食住をもじて「ゆうしょくじゅう」、「ゆう」が遊ぶという「遊」で、「しょく」が食べる、「じゅう」が「住む」っていうふうに書いて「遊食住」なのですが、それを掲げて美山での自然体験の場を提供する会社です。



座談会で出た発言を大きくまとめて4点あげます。一つ目は、森との関係についてです。住んでみると、森は意識のない存在だそうです。また、昔は林業が盛んで美しい森が保たれていたようなのですが、今は林業では生計をたてられないということもあり、林業離れが進み、森と人との関係が希薄になっているということもおっしゃっていました。

(三谷)

次に、子どもへの教育に関してのお話がありました。3人のパネリストの方の意見では、現在都会でも田舎に住んでいる子どもでさえ

も、自然に触れて遊ぶ子が少ないという現象をいわれて、それをとてもさみしく感じていると言われていました。また、美山町の北村地区、先ほどの茅葺の集落の地区では、現在小学生が5人で、20キロ離れた小学校に通っているのですが、現在の小学校の教育の制度というものは霞が関で決められた画一的な教育が施されており、そのせいで20キロ離れたプールがない小学校なのですが、川で水泳をするという地域独自の取り組みが行われておりまして、こういう地域独自の取り組みがもっと行われればいいのではないかということをおっしゃっていました。

(二宮)

3番目ですが、移住者に対する思いということで、美山町に移り住んでくる人などの外部の人をのけ者にせず一緒に生活していこうとする思いがあるそうです。

(三谷)

最後に美山町のこれまでとこれからということで、かやぶきの里の集落が、平成5年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された頃から観光客が年間25万人ほどお越しいただいていたのですが、観光の中心にあった資料館が火災で燃えてしまい、一時観光客が落ち込んだそうです。しかし、最近は外国の方、台湾や韓国や英語圏の観光客の方も増えて26万人まで回復しています。また、少子高齢化などの村の問題もあるのですが、今ある美山の姿を残して余計なものを入れなくていけば、この町はこれからも残り、今後上昇していくと強く確信されていました。

エクスカージョン報告 ③ 森の京都コース

(二宮)

座談会を通じて3人から強く感じたことがあって、それが3人とも、美山に対する誇りを強く持っているということです。また、余計なものを入れず、ありのままの美山を貫くことで美山での自然との共生生活が維持されるという前向きな姿勢も感じ取ることができました。

(二宮)

座談会を通じて3人から強く感じたことがあって、それが3人とも、美山に対する誇りを強く持っているということです。また、余計なものを入れず、ありのままの美山を貫くことで美山での自然との共生生活が維持されるという前向きな姿勢も感じ取ることができました。

(三谷)

次に、参加者の感想を一部紹介させていただきます。美山の良さはこの短時間では語りつくせない、知り尽くせないというものがあり、初めて美山町を知ったということで、京都のイメージが東山や嵐山というものだけから、美山町にまで広がった。芦生研究林の貴重な植物も見られて大変嬉しかった。ジビエ料理がおいしく、また食べたいという意見もありました。

(二宮)

最後に私たちの感想です。美山地区の里山の姿は現代に合ったように柔軟に変化しているなあという風に感じました。例えば、会社の設立やエコツーリズムなどを行って、ありのままの美山を残しつつ、更に現代に合うように変えることで、今後も維持されていく里山の姿があるなあという風に感じました。

(三谷)

僕は、芦生研究林という僕たちが行った場所が今京都大学の研究林としてあるのですけれども、それが京都大学の持ち物じゃなくなるかもしれないという問題がありまして、僕は、今後とも研究林として研究され続けてほしいなと思いました。また、座談会の時のパネリストのお三方の言葉が印象に残ってしまっていて、僕は自然とともに生きるという認識はしていたのですが、そんな認識は全然なくて、自然と共に生かさせていただいているという認識でおられました。また、集落に観光客が多かったりするのですが、要らないものは入れたらあかんというお言葉がすごく印象に残っています。

エクサクション報告 ④ 大阪北摂コース

【レポーター：芦谷初樹・大塚友加里】



(芦谷)

まず、大阪の北摂地域というところに行って見せてもらったのが、菊炭と地黄湿地です。発表の内容なのですが、一日の流れ、そして重要なところ、学生の意見というながれで発表していきたいと思います。まず、一日の流れですが、昨日エクサクションでは、次の1~5の体験をさせてもらいました。一つ目は、豊能町の牧にある菊炭クラブが所有されています台場クヌギというクヌギ林の見学に行ってきました。最初に、菊炭クラブの高木さんという方に菊炭を実際に見せてもらいながらこういう炭が作られていて、材料がこういう林にあるんだよという説明を受けました。実際に



その林に入ってみた様子ですが、少し遠目から撮った写真なのできれいに整備が行き届いている様子がちょっとわかりづらいなという部分があると思うのですが、現地は、きれいに整備されたクヌギの純林が広がっていました。クヌギ以外の木がほとんどない状態で、入っていきやすいというような印象を受ける森でした。参加者の中には、この、きれいに規則的に植えられた木、林を見て、クヌギの畑みたいやなっていう風感じられておられた方もいらっしゃいました。もう一つ、この

右上の写真が、台場クヌギの単体を撮った写真です。少し詳しく説明しますと、地上から高さ150cmのところまで伐採し、これを何回も行うのですが、切り口から新たな芽が生えて、またその何年か後にまた伐って、また新しい芽が生えてきて、という形で成長が進んだクヌギの様子です。このクヌギが、山親父と呼ばれているようで、結構大きくなっていて迫力があってすごいなと感じました。

次に、地黄湿地再生地の見学に行ってきました。地黄湿地の様子は、草が茂っていて湿地みたいな感じがあったのですが、深さ60cmほどまで田んぼの状態が続いていまして、足踏み入れたらズボズボと沈んでいくらしいです。比較的堅そうなところを選んでちょっと降りてみたのですが、それでも少し沈んでいきそうだなという感じでした。そこに生えている植物ですが、これはトキソウという植物の花の写真です。こういうトキソウであったり、サギソウであったり、きれいな花が咲いていました。きれいな花が生えている一方で、こういう食虫ゴケの一種の一風変わった植物も生えていて、すごくきれいなどころだなと感じました。この地黄湿地へ行く途中でヘビの抜け殻がありましたが、このヘビの抜け殻を見る前なんです、緑色のカエルをヘビが食べようとしている場面に遭遇して、都会じゃなかなか見られない、すごく新鮮な感じを味わいました。

(大塚)

午後は、能勢さつやま創造館で、菊炭窯の見学と、菊炭職人さんの小谷さんに話をうかがいました。菊炭窯は、人が入れるぐらいのとても大きな窯で、二週間ぐらいかけて焼きます。一週間は細かく火を調節しながら焼いて、残りの一週間でゆっくりとさします。この二週間の間は目が離せなくて、ずっと気を張っていないといけないので大変だと思います。取り出すときに、実際に中に入って取り出すのですが、その時窯の中は80℃もあり、大変な重労働です。しかも、実際

エクスカージョン報告 ④ 大阪北摂コース



にきれいな菊炭になるものは二割ほどしかないで、労力の割にきれいな炭ってというのはなかなか取れないのだなあと思いました。でも、実際に取れた炭をみると、こんなにきれいな炭が取れるなら、多少の苦労もあって然るべきなのかなと思いました。この後、最後に浄瑠璃シアターというところに行き、意見交換会をしました。この時に能勢さやま創造館の代表である、先ほどの炭焼き職人さんの小谷さんや菊炭クラブの方々と意見を交換しました。

(芦谷)

ここから学生の意見として重要だと思ったところを發表させてもらいます。このエクスカージョンの副題として付けられていたと思うのですが、「伝統-森林-未来へ」というところから考えました。まず、森林ということでは、台場クヌギの森林について、菊炭に適している条件が四つあって、ここから菊炭が作られていきます。伝統ということでは菊炭が使われているところというのが茶道の分野で使われていて、どうして菊炭が使われているのかというと、バチバチという炭が破裂するような音がなく、チリチリと静かできれいな音が鳴るというので使われています。また、炭で火を起したときの豊かなにおいであったり、紋様がきれいな形をしていて、燃えきった後もきれいであったりすることです。最後には結局なくなってしまうその侘び寂びの精神ではないですが、そういうところが評価されて、菊炭というのが使われています。この二つのことが、森林と伝統ということでは言えると思うのです。菊炭という使い道がないと、森林の里山がなくなっていくというのが一つ言えるのではないかと思います。

しかし、逆に菊炭が先になくなってしまっても、茶の文化というところで、伝統の良さが失れていってしまうということになり、森林と文化というのは深くかかわっているのだなということが今回のエクスカージョンを通して感じる事が出来ました。

(大塚)

最後に意見交換会の話について話したいと思います。意見交換会



では後継者の不足、お金の問題が出てきました。やはり、伝統を消失してしまうという結果にならないように私たちができることはないか考えてみました。そこで出てきたアイデアが、地域の人や、ボランティアの協力がどうしても必要だということです。次に、子供や学生を呼び込む機会をつくってはどうかという意見。山村から都市へ、都市から山村への動きをつくるということですが、やはりお金はとても大切なので、経済としてやり取りできるように、お金の調達を考えることが大切だと思います。

最後に需要のチャンネルを増やすということが出てきました。これは、少しわかりにくいかもしれませんが、これを実際にやられている活動では、菊炭でコーヒーを焙煎するという体験をやられていると聞きました。炭焼きを見てもらうということも大切だとは思いますが、それだけじゃなくて、新しい視点から、コーヒーから入るっていうのがすごく面白いなと思いました。コーヒーの味というのは実際に飲んでみないとわからないと思うのですが、現代の社会では、ネットとかが発達していて、ネットで想像できてしまうというところがあるのです。でも逆にそういう味とかがわからないというものは、どうしてもでできませんので、この好奇心というのをうまく使って、それで人を呼び込めたらいいのではないかなと思いました。

パネルディスカッション ～テーマ『これからの木づかい森づかい』～

【コーディネーター：篠部幸雄】

【パネリスト：多胡歩未・小谷義隆・高御堂厚・松田純一】



(篠部)

では、今回のパネリストは、木づかい森づかいということでいろんな立ち位置の方をお呼びしていますが、まず、パネリストの方から自己紹介をしていただきたいと思います。それから全体の話を始めたいと思いますので、多胡さんからお願いします。

(多胡)

はじめまして。京都と奈良の境の木津川市加茂町というところで、木のおもちゃの制作活動しております多胡歩未と申します。私たちは、子ども達の想像力をいかに引き出すかということに全力を注いで活動しております。想像力は、子ども達は本来ふんだんに持ち合わせている本能なわけですけども、今の子ども達は想像力を必要としなくても、なんとなく生きていってしまう世の中になっているんですね。その想像力というものをいかに引き出すか、それがどれだけ大事かを子ども達に伝えていくことをやっています。

私たちは子ども達を森に連れていくという活動をしています。学校教育に林業が入っていないという以上、子どもたちが、森や木について知る機会というのは、下手すると大人になるまでないだろうってこともあり得るので、そういう機会をつくっていかないといけないなというところから始まっています。私の世代ですら、木を伐ってはい

いけないとか何故木を伐るのかとかいうことは一切なかったもので、今の親世代は知らないのも当然で、子ども達にも何も伝わっていないと思うんです。今の子ども達にそういうことを伝えていく、すると、その子ども達が大人になった時に自分の子どもに伝えていて、100年先の森もちゃんと持続しているよっていうことを願って活動しています。森の中で遊ぶということは、たくさんの想像力を必要とするのです。知恵を働かせたりとか工夫したりしないと、森は楽しく遊ぶことは出来なくて、その森の切り株とか斜面とか生き物とか、そういう要素そのものが子ども達の五感に刺激を与えてくれますので、子ども達が森に入るといことは、そういう効果があります。



では、木のおもちゃですけども、何故木のおもちゃなんだっていう話ですけど、普段から

木のおもちゃで遊ぶことで、想像力は育まれます。木のおもちゃというのはシンプルすぎて、想像力を働かせないと絶対楽しくないんですよ。勝手に動いてくれないので、自分から遊びかけないと、絶対楽しくないおもちゃです。木のおもちゃで遊んでその想像力を当たり前で起動できるようになる。それを続けることで、磨きがかかっていく。そのような素地ができていると、森に行っても最初から思いっきり遊ぶことが出来るんですね。工夫する力とか、物事を判断する力、考える力を持ち合わせていますので、森の中へ入って、いつもと全然違う状況に入った時ちゃんと自分から動けることになります。その中で育まれる自然に対する敬意とか想像力は、大人になった時に森を考えるとという行動に結びついていくことを信じて、子ども達を森に連れて行って、想像力を引き出すことを全力でやっております。

私たちがつくりたい森っていうのがアルミトイのビジョンですけども、その森の中は、

人の流れや仕事や生活っていうのが全部循環している森なんですね。今、人々は、その全てが町にあるので町に依存して生きているわけですけど、私たちはそれが森にあったらどれだけいいだろうというビジョンを描いていまして、そんな森が日本中にあると、この日本がもっと生きてくるんじゃないかなと思っております。

(小谷)

合同会社能勢さとやま創造館の小谷といいます。炭をやっていますが、どんな炭かというのを皆さんに知ってもらいたいなと思っています。私に取材があった一時間番組を頑張って6分30秒に縮めました。これは竹内結子さんナレーションなので乞うご期待ください。(※映像とナレーションで紹介)

(高御堂)

小谷さんかっこよかったですね。南丹市美山観光まちづくり協会から参りました高御堂と申します。私の方は町づくりとか暮らしというような視点で、町づくりの町である美山町のことをお話しさせていただきます。森は95%ぐらいのところで、森の中に住んでいるという、また、森から流れ出す清流とともに暮らしているというような町です。平成元年から都市交流をして、観光施設を作ったりしながら、当初は20万人ぐらいが、現在90万人ぐらいの観光客がおいでになっている所です。観光の中心になるのが、かやぶきの里というところになり、もう一つは、京都大学の芦生研究林。原始的な森が残っているということですが、そこに限らず美山町全域に豊かな自然がたくさん残っておりまして、昨年の3月に京都丹波高原国定公園に美山町全域が指定をいただいんです。その中でも特別保護地区というのが芦生の森となっております。

昨日の朝も家の犬が吠えましてね、朝からうる



さいなと思ったら、アナグマが出てきまして、ふと、対峙してですね、アナグマも負けじとにらみ合いをして、あれだけ近くでアナグマをじっくり見たのは初めてで、「あ、ラッキー」と思いました。私自身もかやぶきに住んでおりまして、調べてもらった、ハチが二十数種類巣を作ってくれていると、ストローの中にですね。そういった一体感というんですかね、アナグマもいて、冬になると、テンという動物が自分の家のように天井の裏を走り回っていると。雨が降っても雨の音すら聞こえない静かな中にまた静けさが広がるというような暮らしの中で生活しております。そこに暮らす人の暮らしぶりが風景を形作るとよく言われます。木を伐ってしまった国は、今砂漠化しているかもしれませんし、草原になっているかもしれません。森を慈しんで守ってきた地域であれば、そういった風景が広がっている。ひょっとしたら、ほこりの落ちていないつつましい暮らしぶりをしていて、そこのその風景を形作っているんだなあというのはいつも感じています。

実は私1ターンでして、愛知県で生まれて24年前に美山町に移住したので、ちょっと横から美山町を見ておりまして、中途半端な田舎児ですけども、田舎の暮らしは素晴らしいし、つつましい中で生きているんだなあと思っております。ただ、この暮らしの先に、生きていかなきゃいけないというところが地域にはありまして、毎年百数十人の人口は減少しております。元の数に4,000人きっていますので十年先には3,000人をきって人がいなくなる地域であるだろうとは目に見えているんです。観光でたくさんおいでになる割には、空元気元気そうに見えるかもしれませんが、実態は高齢化率44%です。今頑張って森での暮らしの中から生きる力をつけないと、この先集落自体がなくなってしまうだろうという危機感を持ちながら暮らしている所です。私の所属する協会ですが、例えば観光の事業者と行政と住民との中間に立って町づくりの支援をしていければというところなんです。今、一番課題としているのは、美山町も稼げる地域にならないと生きていけないかなというところで、毎日がきながら暮らしているということ。

(松田)

森林組合連合会から来ました松田といいます。森林組合というのは、地域の森林所有者さんが出資してつくっている協同組合で、全国620くらい森林組合があると思うのですが、京都は20森林組合があります。その森林組合を会員としている組織が京都府森林組合連合会です。府の森林組合は、それぞれの地域の山づくりについて、組合員さんとか森林所有者さんにいろんな提案をしたり、お仕事をいただいて実際の山の施業をされています。そういう森林組合が、ちゃんと仕事が効率よくできるように、支援したりアドバイスしたりというのが連合会の仕事になっています。

今日は山使い木使い
ということですが、一番山側に位置している組織で、皆さんが山を使ったり、木を使ったりするときにちゃんと山が健全に保たれている、木が使えるようになっている、ちゃんと木が生産できる、そういう組織活動になるように「wood first社会の実現」ということで、まず木をつかうという運動も展開しています。



(篠部)

これから木を使う、森を使うということが、テーマとしてもうたわれていますので、松田さんのところが関わっておられる人工林が中心になると思うのですが、京都の森からどういう形で材を出そうとされているのか、出しつつあるのかを、課題も含めて教えていただきたいと思います。

(松田)

木にも、年齢がありまして、何齢級と5年刻みですけれど、京都の人工林で一番多いのは9~11齢級ぐらいですかね。45~55年ぐらいです。通常は50年から60年ぐらいで全部伐って収穫して、また植えなおすというサイクルが、いわゆる林業ですけれども、今、材価がすごく安くなっていて、

伐って出しても、採算が合わない。法律では、刈ったらまた植えなきゃいけないので、植えて育てて行くのに、間伐の一回、二回目、20年目くらいまでが一番コストがかかる時期ですが、そのコストがなかなか生み出せないということです。

戦後、拡大造林期に、京都の山もたくさん木が植えられ、それが収穫できるときにきているんです。それを、どうやって利用していかうかということで、行政も取り組みをしていますけども、材価が安いので、なかなか進まない。森林所有者さんも高齢化され、町に出ていかれたり、世代交代があって、山離れが進んでいる。森林組合の方でも、施業の提案をするんですが、所有者がわからないとか、境界がわからないとか、問題があってなかなか進まないですけど、森林組合系統では、コストを削減しながら、作業を効率化させ、少しでもたくさん木を山から出して、有効に使ってもらう取り組みを進めているところです。植えてから、収穫するまでに、50年とか60年とかかかるのが林業の大きな特徴なんですけども、自分で植えたら孫の代ぐらいでないと、きれいな大きな木になっている所が見られないという、それが素敵だと思うのですが、木を使おう、生産力をアップしようといういろんな取り組みをしていますけど、問題はたくさんあるということです。

(篠部)

ありがとうございます。高御堂さんの場合は、最近農水省の方でも、エコツーリズムを発展させて、サステナブルツーリズムと言っているんですけども、木材生産だけじゃなくて、森林を使ってそれを観光産業あるいは環境産業を含めて、地域おこしに深くかかわっておられる美山の話をお伺いしたいんです。美山はかやぶきの里、芦生の研究林という大きな財産抱えておられてですね、観光産業としてやっていくためにも、そういうコンテンツを糧にして、そういう誘致ということを継続的にされていると思うんですけども、やってこられた経緯の中で、やってこられたこと、ご苦労されたことをお話しできればと思うんです。

(高御堂)

エコツーリズムがどうして始まったかというのは、南米の国がチョウチョを標本で海外に輸出するよりは飛んでいるチョウチョを見てもらって、観光して、宿泊して、食事もしてお土産も買ってもらった方がプラスになるだろうと。同じようなことがアフリカのナショナルパークでライオンを撃つよりは見に来てもらって、大勢の人たちが宿泊してホテルに泊まってというような発想だと思います。そのために観光、環境を守ろうと言うような発想ですし、アメリカの野生動物の管理も結局は人間がハンティングしてとるために環境を守ろうと、人間勝手な都合で動物とか森を守っているわけですが、森づかい木づかいというのは、文字を見た時に、もう一つ気持ちの方の気遣いを使うのかなと思っています。エコツーリズムの課題は三つありまして、結構手間がかかるというのが一つです。少人数で、マイクロバス1台くらいのなかで、地域の文化の体験や交流をしていくので、結構手間がかかって大変だなというイメージが一つ。もう一つは情報発信力が地域によって弱いと言われてきたのですが、最近はWebがあるので、だいぶ解消され、大手の旅行会社も逆に小規模のエコツーリズムがしたいと参入してきているところなんです。最大の問題は地域と協力していくというのがエコツーリズムの一番の肝で、地域の人達の暮らしや文化は、ずっと続いてきたもので、それを観光の資源として活用することはそんなに簡単ではなく、例えば、藁大工なんかがいいもんかい？こんなんでお金をとるんかい？みたいな発想もありますし、口下手な方は人前に出たくないですし、色んな方々がエコツーリズムの中でガイドやインタプリターといった立場になりうる。逆に活躍の場がどこにでもある。そういったことを引き出すのが我々の仕事かなと思っています。それで稼げる仕組みを作るのがとても大切で、美山町では、20年間、国内の人がどんどん来てくれました。一日にお客様が美山町に落とす金額いくらだと思います？1000円前後なんですね。かやぶきの里に関しては700円か800円なんですね。お漬物ひとつ買ったら終わりなんですね。

もう一つ、かたや京都市内の観光名所ではおいくらだと思います？大体13,700円と言われていまして、十分の一しかお金は落ちてない。その中でもほんとに美山町の中にお金がどれ位落ちるのかと。

私がもう一つ働いているのが、美山ふるさと株式会社で、地域を元気にしなさいというような会社です。牛乳とか色んな特産品もあるんですが、自分のところでは作れないので、よそで作ってしまう。旅行会社も作りました。バス会社も持っています。宿泊施設もあります。自分たちで観光に関しては全部できる体制はとっています。ただ、商品を作っていくということが簡単には出来ないで悩んでいるところなんです。もう一つ最近インバウンドといい、台湾あるいは韓国から沢山おいでになりますが、ひょっとしたら日本人と同じ結果に終わるのではないかな？たくさん来ても消費単価が700円で終わってしまったとはいう反省をしながら今所属団体では稼げる力を作っていく、マーケティングをちゃんとターゲットを決めてということをやっています。美山いいんでしょ？こんな自然いっぱいあるんでしょ？伝統食もこんなあるんでしょ？と。でもそれ誰が買ってくれるの？という発想があまりなくて、それを我々みたいな中間組織がマーケティングして、受け入れをして、最後まで精算をするという取り組みをしなければいけないという課題の中から生まれてきた組織かなと思います。

(篠部)

今の京都市内は外国の観光客で溢れてまして、高御堂さんが仰っていたインバウンドの観光客を取り込まれているというのはすごい事じゃないかなと思いますね。花脊にはあんまり入ってっておられない気もするんですけど、そこらもお尋ねしたいんです。それと地域にいかにお金を落としてもらうかというのが非常に重要かと分かりました。

では、小谷さんは大きく2つやっておられ、一つはクヌギを調達して炭を焼いておられるというのと、あと炭焼きも受け入れて、ツーリストにも公開して炭焼きの現場を見せておられるということで、炭づくりという部分と、町おこしという部分も担って

おられるのですが、そこらをやってこられたことを課題も含めて木使いということでお話願えますか。

(小谷)

まずクヌギ調達、そして炭焼きという話ですけども、先ほどもありましたように炭焼きというのは日本の一つの産業であり、生活のための営みであったと。燃料を得るために、田舎の方では必ず裏山の雑木を使って炭を焼いて、それを冬の暖、日々の料理、生活のための燃料として使われてきた。日本が化石燃料、地下資源が乏しい国であって、昔から炭というものを非常に生活で使い、いろんな産業の元として使ってきた経緯があると思うんです。そしてどんな所でも使いやすいように、元々は不完全な炭なら煙も出るしガスも出る。目も痛くなる、場合によっては倒れる。そんな炭でも改良して部屋で使えるようになってきた。そういうものがあって、今の茶の湯文化にも繋がってきたと思うんです。これはやはり日本人が、持続可能な、先に繋がっていくと考えた中での技術かと思います。そして、森林組合の方も仰っていましたが、出荷の適齢期を迎えているけど問題があると。その一つ前のサイクルにはおじいさんが植えた木を本人が伐るといって、孫まで考えた生活をやってきた。これは日本の生活、営みのルールだったと思う。これが持続可能な日本というものを作ってきて、その中で色んな知恵を作り、伝えてきたというのがあると思う。そのような昔ながらのスタイルで材を調達し炭を焼いていくその部分で昔から大切に残してきた自然環境をまた繋いでいっているのではないかなと。但し炭焼きというのは北は北海道、南は沖縄までであると思います。クヌギの炭は本州にしかないと言われてますけども。そういう炭焼きでは、広葉樹を使う炭焼きの循環は非常に意識され、そのなかでやってこられたものだと思う。

今、日本の技術やシステムは世界的に、やっぱり違うなど見直され、日本の文化も注目されていると思います。そういうところの原点となってい

るのかなと。グローバルな視点から見ても日本の中にいっぱいそういう仕組みがあると思う。それを見直し現代風に活かせるもの、そして将来的に使っていけるものというのを現代風にアレンジしながら次へ展開させていくという視点に私は立って見ていけばいいのかなと。先ほどのインバウンドの話から言えば、結構来られます。ロシア、フランス、イタリア、マレーシア、最近ではドイツから22人、立命館の先生が連れてこられたんですけど、そんな感じでポツポツと炭焼きというものを見たいということでも来られたりしています。情報は非常に早いしどこまででもいってしまいます。

地域活性化について言いますと、先ほど仰っていただいた菊炭でコーヒー焙煎をしようということで知り合いの焙煎師に相談をかけてやりましたら、微量ながら炭の香りがするんです。普通はこういうドラムで、ガスで焙煎する。それを、菊炭を使ってロースト出来るんです。本当に緑色の豆が20分くらい経ったらコーヒー豆になるんですね。それをミルして、ドリップして飲んだら本当に美味しいですよ。焙煎師曰く、遠赤外線というのが非常に失敗なく焼き上げてるんじゃないかなと。普通は、ムラが出たりで失敗出るんですけど、炭はストライクゾーンが広い、それなりに焼き上がりますと仰っていただいた。菊炭はお茶で使うんでしょ、お茶はあんまり興味無いんです、で終わっちゃうんですけど、コーヒーローストして菊炭で炒ったコーヒーで飲まない？そういう焙煎体験しない？というもまた幅が広がるんですね。そういう形で、今は私がやっていますが、他ではやってないので、もう少し拾っていった点を面に持っていったら、交流を増やし、人口減少に喘ぐ地域を将来に向けて望みを持っていけるような活動をしております。



(篠部)

スポットで入っていくというのをインターネットが発達してるので外国人はそれ見たら非常に拡散するというのがある。そのうち小谷さんの所に雪崩をうって行くのじゃないかという気もします。多胡さんはおもちゃで木材のエンドユーザーとして色々な木をお使いになってるんですけども、どこら辺で集めてこられて、どういう木をお使いになってるのかと。もう一つは、森使いの話でワークショップもやられてるんで、色々工夫されてる所をお話し願えますか。

(多胡)

材の話ですけど、私は、林業で言う川下のほとんど河口の部分だと思ってまして、基本は材木屋さんに相談して調達してきてもらう感じですね。おもちゃに関しては、ブナを使ってるんですけども、日本のブナはほとんど手に入らなくて、白神山地とかほとんど国有林となってまして、伐っても出てくるまでのルートが非常に複雑で、なかなか手に入らない。材もあまり均一ではないという問題があります。今、流通しているのはヨーロッパビーチというもので、ヨーロッパの方のブナですね。私はそれを材木屋さんから入れるか、丸い加工してもらうのであれば轆轤師の人が仕入れて削ってうちに入れてもらうという調達になっています。おもちゃは昔からブナがいいということで、世界中のメーカーさん、日本のメーカーさんもほぼブナを使っていて、硬くて丈夫で加工しやすいという理由から、あと木目が加工の邪魔をしないというのがあって、やはりおもちゃにはブナがとも使いやすいヨーロッパビーチを使っています。その他の材についてですが、私は病的なコレクションみたいになっていて、せっかく使おうと思って買っても、もったいなく使えない。そして使えないから新しく買うという訳の分からないことをしてしまうんです。それ位色々あって、同じ木でも色味が違うからこれはちょっと置いておこうとする。どうしようもない状態です。

世界中からいろんな材を集めているんですけど

も、最近国産材もことをしてしまうんです。それ位色々あって、同じ木でも色味が違うからこれはちょっと置いておこうとする。どうしようもない状態です。世界中からいろんな材を集めているんですけども、最近国産材も多く使うようになりましたし、去年は京都モデルフォレスト協会さんとコラボで府内産材のグッズとかも展開していました。流通しないような庭の木も加工したことがあるんですけど、ほんとに美しい木目が出て、何故流通しないんだろうと思うんですけども、たいがい燃やされたりとかの話聞き、私が心を痛めているとそういった材が運び込まれて溢れかえっているんです。ビーバー製材という製材をする方がいて、ビーバーのようにあちこちから色々な木を集めてきてということからビーバー製材という名前がついてるんですが、そういう方のところに行くと、まとまってない数でもちゃんと製材されて保管されているところもあります。

ワークショップについてですけども、私が山に入っている人と話す中で始めたことなんです。私は、どんな材がどんな色をしてこの木はこんなんでというのはわかるんですが、実は立木の姿を知らないんですね。逆に山の人は何を見たら何の木と分かるんですけど、その材が何色でどんな用途で使われているかというのを知らないという話が非常に面白くてね、一緒に歩いてこれ何々の木と言われて、この材はすごい肌が切れてて真っ白でねと言うとびっくりするんです。逆に私はこういうの使ったことがあると言うとこれはこれだと言われてなるほどというのがいっぱいある。私はエンドユーザーに近い立場の人間として木は生き物であって、呼吸もしてまずし膨張もするし乾燥もするし、そういうので木は伐られた後も生き続けていくんだよというのをずっと言ってまして、あと循環する命であるから、ほんとに使わなくなったら最後は灰になって土に戻る。次の命を育むんだよというメッセージはずっと発信していたんですね。木は元々生きていた、今この形だけ生きていた。これは今の子どもたちがお肉や魚の切り身が切り身であるのと同じ状況だと気づきまして、これは元々豚さんだった、

これは元々海で泳いでた魚だということに、思い馳せてもらうために木は森に生えていたんだというのを子どもたちに教えてあげようと思って連れていく、そこで伐った木をその場で、自分たちで加工する、自分たちで使うということを始めました。それによって、家に帰って自分たちが作ったものから森に思いを馳せてもらえるんじゃないか、考えるきっかけになっていけばということで活動しています。

(篠部)



なかなか興味のある話をいただき、ありがとうございます。やっぱりトータルとして見せるということが必要ですね。森林インストラクターの私も立木はわかるのですが、あんまり材がわからないのですが、仲間には材を見た途端分かるというメンバーもおります。

松田さん、先ほどの流通の問題、山村の問題、それと付加価値を高めるということで、連合会も子会社を持って製品をやっておられるみたいで、そこらの話と、今後の人材の育成、継続という所、未来に繋げるという意味でお聞かせ願えるかと思えます。

(松田)

まず木材の流通に関して、多胡さんもどうやって欲しい木を手に入れたらいいかという話をされてましたが、木材組合連合会という組織があり、加工ネットワークというインターネットで検索していただいたら、こういう府内産材がここで入手出来ますという情報公開はされてます。元々木材の流通は多段階で、その段階がすごく分断されている気がします。森林組合の立場で言うと森林集材さんの山から木を伐って出してきたら、

大型製材所に直送するというシステムが確立されています。以前は原木市場に持って行ってそこで競りにかけられて次の段階の業者さんが買っていく。製材木になったり工務店さん材木店さんの方に行って最終消費者の所へ行くという間がたくさんありますので、森林所有者さん森林組合も市場に出してこの値段で売れたという所で終わってしまう。その先どこに行ってもどう使われるかというのはほとんど意識して無かったということがあります。そういうことがあるので、最初にどういう物が欲しいということをおもひにあまり考えない。ニッチみたいな原木の供給も森林組合こそありなんじゃないかなと。

もう一つ大きな課題は、分断されているにも関わらずそれをコーディネートする人がいないんですね。今、国の政策で川上から川下まで一体となっていますが、色んな段階を超えて繋ぐ人が少ないなど考えています。それから連合会では加工施設を持っています、木は自然物ですのでそれぞれ違いますが、なるべく工業製品に近づける。丸棒加工と言って円柱に加工する施設を持っています。公共事業の部材として使っていますので、一般の方が使う商品は今のところないんです。それだけじゃいけないので、新しい使い方がないかと模索している最中です。

15年くらい前まで林業の従事者は減り続けています。なおかつ高齢化というのが大きな問題だったんですけども、国の事業で新規参入者を育成する緑の雇用の事業が今年で15年くらい経つんですかね。人が欲しいけども人を雇うほどの負担が出来ないという所に新規雇用して安全対策や整備の仕方を研修するという人材育成の事業がありまして、それが続いていますので、現在の林業従事者の3割くらいは緑雇用の出身者というんです。精度も段々きめ細かくなって、今は初めて入って研修生になる1年目2年目3年目まであって、そこからキャリアを磨いて、5年目にリーダーになれるような資格を取得する研修があって、最後に10年目まで経験を積んだ人が全体をマネジメントするという研修体制になっています。これが好評で予算が足りないくらい毎年されていますので、この効果はものすごく大きいと思います。僕なんか林業始めた時の装備というのは地下足袋

でただの作業服で、チェーンソー使ったり林業機械に乗ったりしていましたが、今、ものすごくカラフルなカッコイイカッコで仕事をするというのが当たり前になってます。よく3Kとか言うて来ましたが、今はもうカッコイイのKですね。

(篠部)

日吉町森林組合とか見学させてもらおうと皆さん若くてカッコイイですよ。じゃあ高御堂さんの方でも人口は減りつつ何とか森も維持しつつ、そういう環境産業としても形を作っていくという所で、高御堂さん一人で相当頑張っておられると思うんですけど、今後の人材育成、地元の協力という所も、どのように進めておられるかお聞かせ願えればと思います。

(高御堂)

美山の場合はよくある1ターンとかUターンとか最近では孫ターンと言うのがあります、親は出ちゃいましたが、お孫さんが帰ってくる。まだお家は美山にあるとか色々な関わりで美山に住まれる方がいると思うんですが、ほんとに人が大切ですし、美山の一番いいところは何と言われたら人がいいと言いたいですね。風景も自然も食べ物もいいんですけど、きっとそれぞれの地域で誇れるものは人だと思ってますので、ただそこで住みたい暮らしと思う時に何が必要かと言うと夢であるとか未練であるとかそこで暮らす信念であるとか、そういった心根の部分が共有できる人たちが一緒に仲間になって暮らして欲しいなと思ってます。私が勝手に作ってんのは「かやぶきの里から未来が見える 伝統文化が今最先端」というキャッチフレーズなんです。暮らしぶり、コミュニティもそうですし食の安心安全もそうですしエネルギーの問題もそうですし、何故日本の中山間地の暮らしから学ばないのか、そこに飛び込もうとしないのかといつも思っています。まあ街は街で暮らしやすいですし便利ですし、ひょっとしたらお金があれば何でもできると勘違いしてしま

うような社会かもしれないですし、そういう世界からちょっと離れてみると何が大切なものなのか、何を生きがいとして暮らしていけるのかというのは、やっぱりその人が気づいたり考えたりしないと出てこないわけで、色々な人との触れ合いとか出会いとか、とっても重要だと思います。美山町ではそういった理念を持った事業者の方がいて、昨日座談会で出られた、藤原さんもそうだと思います。今朝も彼マイクロバス運転して上りに出かけていきましたけども、20人の学生を連れてですね。彼はまあ自給自足の暮らしを口ばかりではなく実践したいということで猟師もされてますし、農業も無農薬で栽培されてますし、それは凄いことだなと思いますし、それを学びたい若者も来る。例えば私の所レストランのサービス係募集しますといってもまあ来ないですね。時給は840円で最低賃金です。ハローワークに出しっぱなしにしていますが来ないですね。田舎暮らしって不便なのを便利にするような暮らしがたくさんあるんですけども、美山に住んでる人たちも自分たちの暮らしに誇りを持ったり自信を持っていないとそこ住みたくないと思うんですよね。美山の今80代のその上の人たちは、美山からきたって恥ずかしくて言えなかったと言ってます。酒飲みに行くじゃないですか、お前どこから来たんや？京都のちょっと北の方から。お、高尾か。あそこは綺麗だな。だいたい山だけ。いやいやもうちょい北なんですよ。あ、周山か大変だな。いやもうちょっと上...え、どこだ？美山です。お前猿か！と言われたそうです。そういう時代からすると、50代の我々の世代って結構美山にいいイメージ持ってるんですね。子育てしていると、美山いい所だろう、うちの家ではクマ飼ってんだと子どもにはずっと言って、裏山にクマを飼ってますので秋になったら柿を収穫にくるという話も昨日ガイドからもありましたが、そういった自分たちの暮らしに自信を持って誇りを持ってれば、子どももひょっとしたら帰ってくる。街に行ったら社員になったり公務員になったりという選択肢しかないのが、美山で暮らそうという選択肢がきくと出てくる。そんな住んでいる人の気持ちと来る人の

気持ちがしっかり合わないと、たまたま来ても
きっと数年でいなくなってしまうことが起こり得
るので、そのへんは夢を持って、誇りを持って暮
らす、お互い認めあうというのが、お互いを高め
合う一番大切な事かなと思ってしています。

(篠部)

ありがとうございます。では小谷さんに後継者
問題、あるいは森の後継、木をどういう形で調達
するかということも含めて、考えておられるこ
と、今後やろうと思っておられる所をお願いしたい
と思います。

(小谷)

今日、ここに来させてもらってすごい良かった
など、いい話をたくさんきかせてもらって、通じ
るところがいっぱいあるんですね。まず人材育成
については、松田さんから紹介があった所謂雇用
ですね。今日、実はうちの社員であって弟子であ
るものが来てるんですけど、緑の雇用でもう3年
目で頑張ってくれてるんですよ。やっぱり
林業系の事業所はそういう補填がなければ、なか
なかいかないところがあって、色々な山の整備の
知恵、色々なものを学んでいくというので頑張っ
てくれます。先ほど高御堂さんが仰ってたこと
の凄く共感する所があって、やっぱり夢、理念が
一緒の人が来て一緒に頑張っていく、その中で
その地域に対して自信、誇りを持てるようにしてい
くという所が一番大事かなと思ってまして、人材
育成と言うのは、人と人の触れ合いの中で人生、
生活が充実しているかどうかという風にも繋がっ
ていると思うんですね。今私がしようとしていま
す地域活性化であり、地域が持続可能な形で将来
にもいけるような面倒見られるような人を考えて
るんです。

そうした場合、1ターンとかになってきますと
そこに魅力がなければダメですし、自分の夢、理
念を思って生活できるような所であらないとダメ
だと思いますね。そこに合ったものがあるかどう
かを探している人に発信して行く必要がある。

発信をしつつそこを訪れた人が、人と人の触れ合
いの展開になってくるわけで、そこに住んでいる人
たちが自慢できる、誇りが持てるそういう地域でな
いとダメだと思う。人材育成に関しましてはそうい
う中で人材が作られてくる。例えば菊炭に興味があ
るならば、そこに携わってまた繋いでいく人になっ
てもらおう。そこは生活ですから、経済的に成り立つ
ような稼ぐ仕組みを合わせて作っていかないとダメ
だなと。とにかく来られたら色々な形で稼ぎたいと
さっき言いましたけど、京都市内で13,700円でし
たっけ？美山で1,000円。何故大阪USJ遊び行ってね
10,000円20,000円ばーっと払ってきて、能勢来たら
タダで来れるって、道端の山菜いっぱい取って、落
ちるクリいっぱい拾って、タダで遊べる田舎じゃな
いんですね。田舎はやっぱり皆で守（もり）して
るんですね。その部分をどうあれば胸はって
拾ったクリ持って帰れるような接点を作り出してい
くことですね。田舎の人は街中に行ったらなんかこう
街の人、街の人は能勢に来れば自分の庭に来てるん
だなという、その接点を上手く作り出していくこ
とが必要じゃないかなと。



その中で先ほど、木を切ってその場でもの作って
いくような体験させてと仰ってましたけど、私の
所も、生木をそのまま形に変え、しかも電動工具は
使わない、そういうグリーンウッドワークというの
があって、それを是非とも雑木が沢山ある能勢の里
山にね。悲しいかなクヌギでない菊炭は出来ない
のですが、それ以外の邪魔なものは伐りますよね。
その木は、そういうものであると生かされるんです。
だからそういう使い方を加えて遊んでもらい、そし
て勉強してもらう場にしていけたらなというよう
なことも考えております。

(篠部)

多胡さん、人材育成は1人でやられてるわけで、どこまでお考えになっているのか、お子さんなんかは人材の育成になっていると思うんですけど、そこら辺と、さっき森のデザインで、いつ頃からあのような形でお考えになって、将来どこの森でやってみたいのかなというあたりを教えて貰えるとありがたいんですが。

(多胡)

今スタッフと2人で、チームとしては外部の人もいて4人でやってるんですけど、森と関わりたい人はいっぱいいて、さっきのナノビジョンの絵とかに共感してくださって、そういう意味では経済回るのかなと思っています。例えばその絵の中で山の人には山の仕事をして、伐ってきたのをその場で製材して、私の工房がその中にあったとしてそこで使うという循環もありますし、人が集まるとそこに食事するカフェとかレストランがあったりというのもあるし、子どもたち集めて教育の場にもなりますし、お母さん達がちょっと集まれる場所があったりとか、あとはもうシェアオフィスみたいな感じで、会社に行く必要がないフリーで仕事出来る人のオフィスであったりとか、循環の農をやりたい人たちが作物育ててそこでまた種を採って循環させるとか、全てそこで循環していく場所ということで、この森の中で素敵な経済が回るのではないかなと考えています。

あのビジョンは、昔から漠然と人が集まる場所を作る、まあ自分のところが木津川市の加茂町という美山と非常に似た雰囲気のお茶畑と田んぼと川があってという所に住んでるんですけども、住み始めてからも何故か人がやたら集まってくるというのがあり、そこから自分の世界観を活かして人が集まってきてもらって、喜んでもらってというのが派生して、更に経済が回って多くの人に関わってという森が出来たらいいんじゃないかなと思います。私は、自分のところの農家の森で出来たらいいんですけど、森の所有者さんが分断されて線がいっぱい引かれているだろうという森の中

の話なのでどこから手をつけたらいいか分からなくて、誰か助けてください。

(篠部)

ありがとうございます。これからどのような森を作っていきたいかと、難しいこと言ってるんですが、松田さん、山から平行線の森へというの仰ってたんですけども、皆さん、一言二言お願い出来ますか。

(松田)

よく多様性のあるとか多面的機能の発揮と言いますけども、これからも色々な森の恵みを享受できる山でいて欲しいということですね。もう一つ今日、木を使うという話ですけども、今まで木造でなかったものを木に変えて、木質化して使うという話があります。そこで終わりじゃなくてずっとまた木を取っ替えて使っていくというのが本当の木を使うということで、色が悪くなったり割れたりしますけども、それをまた取っ替えて使えるというのが木の良さだと思いますので、そういう使い方をして本当に木を使うということになるんじゃないかないつも思っている次第です。

(篠部)

では高御堂さんお願いします。

(高御堂)

私は森への関わり方という意味では心の拠り所であるのかなと。田舎の人たちにとっては精神文化でもありますし、奥山の里山と言ったらやっぱり神様がいて立ち入れない部分があったりするわけですよ。色々な祭りがあって山の神様がいたりというような95%森のところですし、植林率48%ですので雑木が非常に多い地域でもあります。そういった所で、僕は自然との関わりとか森との関わりを切らない、気持ちの部分で森との関わりを繋げていきたい、それには一つ田舎のイメージがカッコイイというのが欲しいんですよ。おじいちゃんが汚いエプロンしてジャガイモ掘ってる姿、長靴履いてカッコイイんですよ。農作業されてるおばあちゃんの姿、

可愛いんですよね。先ほどの冒頭のビデオでは、日本人って炭にまで美しさを求めるっていうのはびっくりですよね。そういった文化が育めるというのが森の国日本だと思いますので、お日様に感謝したり、森とか見えないものに対する畏敬の念とか、森からたくさんいただけるような関係でありたいなと思っております。

(篠部)

小谷さん手短にお願いします。

(小谷)

山作りは私たちの活動を続けるのみです。受付でパンフレットを配らせて貰ってまして、また見てください。もう一つ情報発信として先ほどのコーヒーの件とか釜のミニチュアつくってピザ焼こうとかやっています。今年はグリーンウッドしようかなと、その情報発信は菊炭の里で検索してもらったらいいですし、私のホームページは能勢菊炭で検索してもらったら数々出てくると思います。私の喋りがもっと聞きたかったらFM小谷で検索してもらったら14分間喋っています。

(篠部)

多胡さん。最後によろしくお願いします。

(多胡)

私はもう大人たちが自分たちのやっていることに対して愛を持ってやっているかどうかだと思っ
たんですね。それが必ず子どもたちに繋がって
いって世代を超えて繋がっていくので、自分の
やっていること住んでいる場所、そういう所に誇
りを持って日々を生きていく大人がどれだけい
るかじゃないかなと思います。

(篠部)

長時間ありがとうございました。もう時間が
来ましたのでこれで終わらせていただきたいと思
います。



(注)

基調講演、コースレポート、パネルディスカッションなどについて、編集の都合上、一部省略等をしています。ご了承ください。

閉会式あいさつ

【京都府立大学 副学長 田中和博】

今ご紹介いただきました京都府立大学の田中でございます。本日はこの会場を使ってお借りいただきありがとうございます。本日は第21回森林と市民を結ぶ全国の集いin京都を開催しましたところ、遠方からのご参加も含めまして多くの方にご参加いただきまして誠にありがとうございました。昨日は4箇所に分れてエクスカージョンに参加していただき、森林と関わる暮らしの歴史を見ていただきました。また本日は全体会議として「伝統－森林－未来へ」というテーマの元に基調講演、エクスカージョンのレポート、先ほどのパネルディスカッションをしていただきました。お蔭さまで大変充実した集いになりました。基調講演をして下さいました宮城さんをはじめ、パネリストの皆様、エクスカージョンのレポート発表して下さいました学生の皆さん、そして今回の全国の集いは、非常に手作り感も溢れる素晴らしい集いになった訳ですけれども、その準備をして下さった全ての方々へ心から感謝申し上げます。今回の全国の集いには若い方も多数参加して下さいました。

本日のテーマは「伝統－森林－未来へ」でありましたけれども、森林との関わりは世代を超えて繋げていかねばなりませんので若い方が参加して下さいましたことには大変心強く感じている次第であります。伝統を引き継いで行く部分と、今日もスマホの話とかも出てきましたけれども、スマホをはじめとする新しい部分をどのように取り入れて、そこの所のバランスをどうしていくのかを若い人たちにその解決の方法を託していきたいと思っております。今回の成果を次回の森林と市民を結ぶ全国の集いに繋げていきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。



アンケートの結果 ～概要～

◆参加者(2日間・延べ) 171名

(6月10日・エクスカージョン：70名 6月11日・全体会101名)

◆アンケート集計数 59 (全体会で配布)

(各項目で回答のないものもあるため、集計結果は59になりません。)

*性別

・男性 43 (74%) ・女性 15 (26%)

*年齢

・10～20歳代 13 (22%) ・30歳代 9 (16%) ・40歳代 3 (5%)
・50歳代 6 (10%) ・60歳代 16 (28%) ・70歳代～ 11 (19%)

*所属等

・学生 11 (20%) ・会社員 10 (18%) ・公務員 7 (12%)
・農林水産業 4 (7%) ・自営業 2 (4%) ・その他 22 (39%)

～その他の回答 (団体職員、NPO職員、団体役員、無職、NPO法人、団体、NPO、
会社役員、無職、森林ボランティア団体、農業、法人)

◆各行事についての感想

①エクスカージョン

・有意義だった 28 ・まあまあ有意義だった 8 ・少し物足りなかった 2 ・物足りなかった 0

②基調講演

・有意義だった 31 ・まあまあ有意義だった 17 ・少し物足りなかった 5 ・物足りなかった 0

③エクスカージョンコースレポート

・有意義だった 24 ・まあまあ有意義だった 25 ・少し物足りなかった 5 ・物足りなかった 0

④パネルディスカッション

・有意義だった 33 ・まあまあ有意義だった 13 ・少し物足りなかった 7 ・物足りなかった 1

参加者アンケート結果

◆個別感想

- 講演者やパネリストの人選が非常によかったです。コーディネーターの進行も、学生さんのレポート発表も良かったです。
- とても充実した2日間でした。この2日間で私は、なかなかかわれないような方々とも交流ができ、全体会も含め、大変面白い話を聞きました。この会のように上の年代の森づくりをしている方と交流できる機会は貴重です。本当にありがとうございました。
- 北山を初めて訪問した。品質の高さに感心し、北山杉の価格の低さにくやすい思い。
- 自分の見たことのない視点で森林を見ている方々の意見を聞いて、視野が少し広がったのではないかと思いました。一方でまだまだ自分の知らない世界があることを強く感じたので、もっと積極的にこういった経験をしていきたいと思いました。
- パネリスト間の議論が聞きたかったです。大人の森林で働いている方と交流ができて、森林に対する興味がふくらんだ。
- 講演者の話が、森林というカテゴリーに制約されすぎている気がした。/エクスカーションコースレポートは、学生らしい視点が見られて良かった。/パネルディスカッションは、現場の生の声が聞いて良かった。
- このシンポジウム全体に関わった方々の「一生懸命さ」が伝わりました。日本は伝統—森林—生活がつながり未来につづいていることが、京都という土地柄よく意識できました。
- 修験道の門主のお話がとっても良かったです。森林だけでなく山の持つ神聖な気持ちをもう一度思い出して森林に感謝したいと思います。人工林と自然林が明確にされていない所があった様な気がします。
- 林業の川上と川下（生産と用途）を全体にコーディネートできる人材育成が必要とのコメントに共感した。（ドイツのフォレストーに匹敵する人材育成が日本の政策にも必要）国民の共感と尊敬が得られる人材。
- スケジュールがタイトで、時間とプログラムのバランスが取れていない印象。意見交換をする場はなく、質疑応答のみだったので、エクスカーションの趣旨と合っていないのでは？（エクスカーション＝体験する場もあまりなかった。）
- エクスカーションは、全体を通して一貫性があれば良かったと思う。レポート、ディスカッションは、知識を得る良い機会だった。
- エクスカーションでは、移動時間が長いと感じたが、美山に行く価値はおおいにあった。美山の人の心いき参考にさせていただきます。
- 共感できること多くあり、自信になった。住んでいる場所、やっていることに自信を持つ大人は、子供に絶対影響を与えると思う。時代に逆行することであっても、その大切さをしっかり（誇りや自信をもって）伝えることが大切だと感じた。

○門主の講演は、日本人の自然観と再認識できてよかった。森林の未来を考える時に欠かせない視点に思う。

○エクスカージョンは参加していないことを後悔しました。

○古都を取り巻く自然体験とその歴史的背景を含めて知ることが出来て有意義であった。若い学生たちの視点がコースレポートにて分かり、大変世代的な相違点が理解できた。

○山村の方々の人間性に触れ、山村の衰退は日本人の品格の問題であり、教育啓蒙が非常に重要であると強く感じる事ができた。

○質疑応答を中心にして「お客さんが欲しい情報」を提供して欲しかった。提供者が言いたいことを一方的に言っていた印象。

○それぞれの立場で「森」「里山」「地域」「観光」「経済」「雇用」について語っておられ、自身の興味関心にひきつけて考え得ることができた。有意義な時間であった。

○木使いと人材育成がつながっていることが良く分かりました。

○内容が充実していた。東山コースのうるしの体験は初めての経験でたいへんよかった。

○パネルディスカッションは、それぞれの方の立場が異なり、話がとても興味が持てて面白かったです。

◆今後希望するプログラム

○農山村地域を守るとりくみが重要と思います。森を守り生かすとりくみを強めることが農山村の今後にかかっていると思います。

○地方に根ざした文化を体験できるプログラム。もう少し時間を長くじっくり体験できるようにすべきだと思った。

○全体的に参加者の数が少なかったのが残念です。企画も良かったので、公知や案内方法にもう少し工夫があればよかった。府大の学生の参加は、大変よかったと思う。

○日本の森林文化を実感できるプログラムを希望します。

○「地域+伝統+森林+デザイン」をテーマにしたプログラム。

○若者、現役世代を森林ボランティア活動に誘う。

○第20回の集いの詳しい報告書はありましたが、今回の内容はもう少しレジュメとかテーマを決めて行われた方が良いと思います。今後のテーマは、森林は災害を防ぐ、生物多様性を維持することと、木材の生産という目的をいかにうまく振り分けて管理していくかだと思います。あと、川下をもっとテーマにしないと林業は維持できないと思います。すなわち、木材利用することに関してです。木材の消費者が多い業界から考えないとダメだと思います。

○実践者、研究者、森に直接は関わらないが森に影響を及ぼすような活動する人が、一同に会して議論できる場所はほしい。

○今後もこのような体験と交流を重点にしたイベントを大切に継続して欲しい。地元の方々の交流にてそのエリアの文化も体感出来ると良いと思います。

【※編集の都合上、抜粋して掲載しています】

～（事務局より）～

平成29年6月10日、11日に、「森林と市民を結ぶ全国の集いin京都」を行いました。参加者はもとより、エクスカージョンの実施団体や説明者の方をはじめ、宿泊や交流会でお世話になった施設、受付やバスの手配などでお世話になった旅行社、全体会の司会の方、講演やパネルディスカッションに出演していただいた皆様、事務局で応援していただいた職場の皆様、全体会の運営補助やチラシ、報告書の作成をしていただいた会社の方、会場を提供していただいた大学の方々、そして何より実行委員会の皆様とエクスカージョンレポーターなどで活躍してくれた京都府立大学「森なかま」の学生さん達に心より感謝したいと思います。

今回の準備は一年半くらい前から始まり、準備委員会から実行委員会へと移行し、事務局でコース、宿舎、会場や募集方法、周知手段の検討など判断を要する事項を検討しましたが、この行事でどのような成果をだすのかは、なかなか難しい問題でした。

京都や大阪などという深い歴史に包まれた地域が森林とどうかかわってきたのか、森を育てる時代から使う時代へと移ってきている中で、未来に向かって何を求めていくのか、そもそも人と森林の関わりとは何かなどを歴史の視点でみることはできないかとの思いが錯綜していましたが、実行委員会で議論するなかで方向性が固まり、今回の内容となりました。

エクスカージョンは各実施団体の企画により、参加者の皆様にはかなり好評だったと感じました。

宿舎での交流会も、60名が和気あいあいながらも熱気を帯びた意見を交わす場となり盛り上がりました。

また、全体会でも森林を修行の場としている宗教者から貴重なお話をいただくことができ、人と森との関りを見つめなおすよい機会だったと思います。森林に興味を持つ若い学生たちがエクスカージョンの内容を報告してくれたことは大きな成果だと思います。パネルディスカッションでは、ユニークな取り組みをされている方々に出演していただき、木づかいや森づかいについて考えるきっかけをいただきました。

参加者の皆様が少しでも森林と人々の関わり、暮らしぶりなどを見聞し、体感してもらえたとしたら、この行事を行った意味はあったのではないかと考えています。このような取り組みを続けることが何より大切なのではないでしょうか。今後の森林と市民を結ぶ全国の集いに期待したいと思います。



（森林と市民を結ぶ全国の集いin京都

実行委員会 委員兼事務局 小島正澄）



実行委員会委員・事務局

実行委員長	篠部幸雄	京都森林インストラクター会・会長／パネルディスカッション・コーディネーター
副実行委員長	和田泰行	京都府林業士会・会長
事務局長(現)	山本英明	京都モデルフォレスト協会・常務理事兼事務局長
事務局長(前)	佐藤廣厚	(前)京都モデルフォレスト協会・常務理事兼事務局長／オブザーバー
監事	平田通文	エコネット近畿・理事長
顧問	田中和博	京都府立大学 理事・副学長／閉会式あいさつ
委員	富永 茂	国土緑化推進機構・政策企画部長
委員	鹿住貴之	森づくりフォーラム・常務理事
委員	山田明子	三洋化成工業(株)総務本部 CSR 推進部
委員	原田喜一	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま 担当(前代表)
委員	諸岡 充	大阪みどりのトラスト協会 常務理事兼事務局長
委員(事務局員)	小島正澄	京都モデルフォレスト協会
オブザーバー(現)	白川伸洋	近畿中国森林管理局 箕面森林ふれあい推進センター 所長
オブザーバー(前)	才本隆司	(前)近畿中国森林管理局 箕面森林ふれあい推進センター 所長
オブザーバー(現)	大下起代	京都府・森づくり推進課モデルフォレスト推進担当課長
オブザーバー(前)	清水辰也	(前)京都府モデルフォレスト・全国育樹祭推進課長
事務局員	川勝隆之	京都府・森づくり推進課
事務局員	今村志帆美	京都府・森づくり推進課
事務局員	小島信継	京都モデルフォレスト協会
事務局員	田中寛子	京都モデルフォレスト協会
事務局員	望月たえ子	京都モデルフォレスト協会
事務局員	和泉志歩	京都モデルフォレスト協会
森なかま・オブザーバー	菊池美帆	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま代表／コースレポーター
森なかま・オブザーバー	古川修平	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま

※事務局：公益社団法人 京都モデルフォレスト協会

出演者・関係団体スタッフ

講演者	宮城泰年	本山修験宗管長・聖護院門跡門主
主催者	梶谷辰哉	国土緑化推進機構 専務理事／主催者あいさつ
エクスカッション担当	松本吉弥	京都北山杉の里総合センター 事務局／「京都北山コース」
エクスカッション担当	水口征親	京都森林インストラクター会 事務局長／「京都東山コース」
エクスカッション担当	高御堂厚	南丹市美山観光まちづくり協会 まちづくり部部长／「森の京都コース」／パネリスト
エクスカッション担当	白井 武	大阪みどりのトラスト協会 事業マネージャー／「大阪北摂コース」
パネリスト	多胡歩未	木のおもちゃ arumitoy 主宰
パネリスト	小谷義隆	合同会社能勢さとやま創造館 代表・炭焼師
パネリスト	松田純一	京都府森林組合連合会 参事
コースレポーター	浅田みなみ	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	西原美緒	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	吉村恒照	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	松井 絢	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	内館佳子	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	三谷光市	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	二宮亜由美	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	芦谷初樹	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
コースレポーター	大塚友加里	京都府立大学 森林ボランティアサークル 森なかま
全体会司会	植月百枝	フリーアナウンサー・仁愛大学非常勤講師

関係先団体

全体会会場	京都府立大学(事務局 企画課)
宿泊施設	京都府立丹波自然運動公園(トレーニングセンター)
旅行社	株式会社ビューティフルツアー(観光庁長官登録旅行業第 1587 号)
運営補助・印刷物	株式会社クリエイティブスタジオゲツク

※法人名称：省略

